

# 常陸公事塚古墳群

茨城県行方郡麻生町教育委員会  
公事塚古墳群発掘調査会

# 常陸公事塚古墳群

## 序

茨城県の東南、霞ヶ浦と北浦の間にはさまれた総面積97.43㎢、人口18,100余人の町——麻生。

この地が人間生活を営むのに極めて良好な自然環境のもとで古くから文化が栄えました。このことは先人の遺した数多くの遺跡が物語っています。

麻生町は、これらの埋蔵文化財の保護と後世に継承する重要性を踏まえ、その対応に努力しているところですが、近年における生活環境の変化や環境整備に伴う開発や造成等が増大しており、遺跡の現状維持保存は非常に厳しい状況となっています。

この度、麻生町大字小高字公事塚339番地の1を中心として土砂採取工事が計画され、文化財保護の立場から、遺跡を保存することを前提として文化財保護審議会等で種々協議を重ねましたが、現状保存が困難であるとの理由から止むなく昭和63年7月20日より発掘調査を実施して記録保存をすることになりました。

本調査を実施するにあたり、茨城県教育委員会、鹿行教育事務所の諸先生方のご指導のもとに茨城大学教授茂木雅博氏を調査主任として、「公事塚古墳群発掘調査会」を発足させ、約2ヶ月間の発掘調査を無事完了することができました。これひとえに調査主任の茂木先生をはじめ、関係各位のご指導、ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

さらに文化財保護に対する深いご理解のもと、発掘調査に係る一切の経費をご負担いただきました 株式会社栗原工務店代表取締役栗原善一氏に対しまして深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

おわりに、本書が行政のみにとどまらず、町民各位、学校など幅広く活用され、文化財の愛護精神と郷土愛を育てる貴重な文化資料となりますことを期待するものであります。

1989年6月1日

公事塚古墳群発掘調査会

会長　根本宗一（麻生町教育長）

# 常陸公事塚古墳群目次

序	文	根本 宗一
目	次	
挿図	目次	
図版	目次	
例	言	
第一	章 麻生町の遺跡（茂木）	(9)
第二	章 調査の経過	
	第一節 調査に至る経過（高野）	(15)
	第二節 発掘調査の経過（廣木・近藤）	(16)
第三	章 調査概要（茂木）	
	第一節 一号墳の調査	(21)
	第二節 二号墳の調査	(34)
第四	章 出土遺物	
	第一節 土器	(46)
	1. 弥生土器について（塙谷）	(46)
	2. 土師器について（塙谷）	(50)
	第二節 玉類（稻村）	(62)
	第三節 鉄器	(82)
	(1) 武器（小沢）	(82)
	(2) 金環（稻村）	(89)
第五	章 科学的調査	
	第一節 一号墳墳丘下の炭化材（須川）	(89)
	第二節 鉄製品の保存修復（青木・犬竹）	(92)
第六	章 総括（茂木）	(96)

## 挿 図 目 次

第1図 古墳群の位置 (1 : 10000) .....	(9)
第2図 公事塚古墳群地籍図 (1 : 1000) .....	(22)
第3図 一号墳墳丘実測図 .....	(23)
第4図 一号墳調査区及び遺構配置図 .....	(24)
第5図 一号墳墳丘下堅穴実測図 .....	(26・27)
第6図 一号墳墳丘断面図 .....	(30・31)
(1) 東西トレンチ断面図	
(2) 南北トレンチ断面図	
第7図 主体部実測図 .....	(33)
第8図 主体部北側鉄劍出土状況 .....	(34)
第9図 二号墳墳丘実測図 .....	(36・37)
第10図 二号墳調査区見取図及び遺構位置図 .....	(38)
第11図 二号墳墳丘断面図 .....	(40・41)
(1) 東西トレンチ断面図	
(2) 南北トレンチ断面図	
第12図 二号墳墳丘北側土師器出土状況 .....	(42)
第13図 弥生土器拓影(1) .....	(48)
第14図 弥生土器拓影(2) .....	(49)
第15図 二号墳出土土師器実測図 .....	(51)
第16図 一、二号墳出土土師器片実測図 .....	(55)
第17図 一号墳主体部南側出土玉類実測図 .....	(62)
第18図 一号墳主体部北東隅出土臼玉実測図 .....	(64)
第19図 一号墳墳丘南側出土劍形品実測図 .....	(78)
第20図 一号墳墳丘下堅穴出土石製模造品実測図 .....	(78)
第21図 一号墳出土鉄器(劍・直刀)実測図 .....	(84)
第22図 一号墳出土鉄器(鐵鎌等)実測図 .....	(85)
第23図 二号墳出土金環実測図 .....	(89)
第24図 剣附着繊維拡大図 (①×3, ②×9) .....	(93)

## 図版目次

図版1 遺跡附近航空写真

図版2-(1) 公事塚古墳群遠景(干拓堤防より)

- (2) 公事塚古墳群の現況(88.06.23)

図版3-(1) 一号墳全景(二号墳頂より)

- (2) 一号墳墳頂部調査区

図版4-(1) 一号埋葬施設(タテ位置)

- (2) 一号埋葬施設(ヨコ位置)

図版5-(1) 一号埋葬施設鉄劍出土状況

- (2) 一号埋葬施設直刀、鐵鎌出土状況

図版6-(1) 一号墳墳丘下堅穴全景

- (2) 一号墳墳丘下堅穴床面遺物の出土状況

図版7-(1) 二号墳全景(一号墳頂より)

- (2) 二号墳調査区設定

図版8-(1) 二号墳南北トレント北側調査風景

- (2) 二号墳南西墳丘断面状況

図版9-(1) 二号墳墳丘北側土師器群出土状況

- (2) 二号墳墳丘北側土師器群出土状況

図版10 遺物(土師器)① 一号墳出土 ②~⑦ 二号墳出土

図版11 遺物(土師器)①~③ 二号墳出土

図版12-(1) 一号墳出土玉類

- (2) 一号墳出土石製模造品

- (3) 二号墳出土金環

図版13 一号埋葬施設出土鉄器(①直刀 ②劍)(撮影=青木・大竹)

図版14 一号埋葬施設北下出土鉄劍

図版15 一号墳出土鐵鎌類(撮影=青木・大竹)

図版16 一号墳出土鉄器X線写真(撮影=石川陸郎氏)

## 例　　言

- 1) 本書は茨城県行方郡麻生町橋門字公事塚339-1 および350-1 に所在する公事塚古墳群の発掘調査報告である。
- 2) 発掘調査は1988年7月14日から同年10月3日まで断続的に実施した。調査の主体は麻生町教育委員会であり、茨城大学人文学部の学生が応援した。
- 3) 発掘調査の参加者は別表の通りである。
- 4) 出土遺物は麻生町教育委員会が責任を持って保管している。
- 5) 報告文の執筆者は文末に銘記しておいた。
- 6) 出土遺物中鉄器の保存処理については東京国立文化財研究所青木繁夫氏に依頼した。
- 7) 墳丘下の堅穴内から出土した炭化材の鑑定については農林水産省森林総合研究所須川豊伸氏にお願いした。
- 8) 調査及び報告書の刊行については次の方々に指導、助言を いただいた。  
志村日出雄、小室勉、吉田恵二、楠元哲夫、須藤宏、西村道一、内野健造、  
山本貴之、岩崎卓也、志村敏夫  
（順不同）

公事塚古墳発掘調査組織一覧表

役職名	氏名	備考
会長	根本宗一	麻生町教育委員会教育長
副会長	門井道隆	麻生町文化財保護審議会会长
理事	平輪一郎	" 副会長
"	鶴下正隆	" 委員
"	茂木清	"
"	藤崎謙一	"
"	村山正寿	"
"	瀬尾利兵衛	"
"	辺田弘	"
"	大川弥右衛門	"
"	米川豊藏	"
"	植田敏雄	" 専門調査員
"	柴原善一	㈱栗原工務店代表取締役
"	茂木直喜	" 代理人
"	茂木雅博	調査主任
監事	栗原善一	㈱栗原工務店代表取締役
"	箕輪徳	麻生町教育委員会事務局長
幹事	根本義郎	" 社会教育係長
"	高野裕	" 社会教育主事
指導機関	茨城県教育庁文化課	
"	鹿行教育事務所	
役職名	氏名	備考
団長	根本宗一	麻生町教育委員会教育長
副団長	箕輪徳	麻生町教育委員会事務局長
調査主任	茂木雅博	専門委員
調査員	稻村繁	"
"	塩谷修	"
"	生田和利	"
"	小沢重雄	"
"	平岩俊哉	"
"	服部文孝	"
"	米川仁一	"
事務局	麻生町教育委員会	

## <発掘参加者>

茂木 雅博（茨城大学教授）  
福村 繁（横須賀市教育委員会主事）  
塙谷 修（土浦市立博物館学芸員）  
小沢 重雄（県立波崎高等学校教諭）  
平岩 俊哉（川越市立砂中学校教諭）  
生田目 和利（日立市教育委員会主事）  
服部 文孝（瀬戸市教育委員会嘱託）  
米川 仁一（國學院大学大学院生）  
廣木 直美／近藤 則子／鈴木 裕一／村尾 浩一／鈴木 裕明／伊藤 修／竹内 光子／関加代子／酒井 克子／小泉佳代子／蛭田 順子／蔡 津／中村みちよ／岩下 祥子／瀬川久美子／川鍋みどり／小笠原 享／鈴木 光彦／志賀 香洋／根本 桂子／宮地 慶江／田中真美子／加藤 直子／照沼美奈子／黒田千穂子／菊池 良子／笹沼 裕子／吉田みゆき／松浦菜穂子／木村 裕子／門谷 純子／金子 房恵／池田千恵子／飯田 直子／青柳麻理子／市川 律子／伊関友久／齊藤 章代／小林美那子／横田 玲子／松村 一恵／佐藤 美和／高橋 純子／柳沢 亮／山岡 千秋／大光 純／菊田 浩基／梅田 勝／染谷かおり／須賀田香織（以上茨城大学人文学部学生）

## <地元参加者>

板橋 博／板橋 正俊／茂木 映子／箕論とみえ／高塚はるえ／坂本 よね／内野 さと／内野 とら／大原 マツ／大輪 タケ／鈴木 俊子／小牧 とみ／小沼 ツヤ／箕 輪 たつ／成島 のぶ

# 第一章 麻生町の遺跡



第1図 古墳群の位置 (1 : 10000)

茨城県の南端に位置する麻生町は、町勢要覧によると北緯35度59分、東経140度29分にあり、その総面積は97.43 Km<sup>2</sup>と記されている。

東を北浦に、西を霞ヶ浦に面する地形は、多くの原始・古代の遺跡を残し、中世武士団の居館跡も多い。

特に現存する常陸國風土記には、行方郡及び鹿島郡の条のみが殆ど完全であることから、麻生町の部分についての記録もみられる。

#### 男高里

「郡の南七里に、男高の里あり。古、佐伯の小高というもの有り。其の居為れば、因りて名づく。國宰当麻大夫の時、築ける池、今も路の東に存り。池より西の山に、猪・猿多く住み、草木多く密れり。南に鯨の岡有り。上古之時、海鯨匍匐ひて、來り臥せりき。即ち、栗家の池有り。其の栗大きなれば、池の名と為せり。北に香取の神子の社有り。」

#### 麻生里

「麻生の里。古昔、麻、渚沫の溼に生ひき。圍み、大きなる竹の如く、長さ一丈に余れり。里を囲りて山有り。椎・栗・櫟・櫻生い、猪・猿栖住めり。其の野より筋馬を出す。飛鳥の淨御原の大宮に臨軒天皇の世、同じ郡の大生の里の建部哀許呂命、此の野の馬を得て、朝廷に獻れり。謂はゆる行方の馬なり。或は茨城の里馬と云ふは、非ず。」

等がそれである。行方郡の条には池を作った開発の記事が多くみられる。男高の里の「栗家の池」もその一つである。しかもこの記事のあたりが公事塚占墳群附近の可能性が強い。

これに対して北浦側に面する側に池に関する記事があまりみられないのは、自然地形から理解出来る。すなわち霞ヶ浦側に比較的平地が多いのに對して北浦側は少ないために水田經營があまり顕著ではなかったことを証明している。

しかし本町における遺跡の分布の実態については未だ調査不充分のために、詳細は知り得ない。そこで本章では麻生町に関する考古学的な記録を紹介することにしよう。最初は『新編常陸國誌』である。ここには「富田故城、小高故城、行方故城」等三故城が記録されている。

しかしそれ以外の遺跡はみられない。

明治42年5月発行の江見水蔭著の『地中の秘密』には「行方半島探検記（上）（下）」が設けられている。この中で江見は「行方の古墳、井貝貝塚、小高貝塚」の三遺跡を紹介している。

明治40年11月12日に上野を発った江見は、成田で乗り換え佐原に一泊して、銚子丸で牛堀・潮来を経て大船津により、2時40分に山田に到着したとある。14日森戸貝塚発掘、15日玉造町若海貝塚、16日井上貝塚、井上廣寺を経て次の様な一節となる。

「井上にて旧家として名高き高野助右衛門翁、及び若主人俊太郎氏は、考古の趣味深く、且つ又家蔵の古器物も多きのみならず、氏の所有地に、玉清井の遺跡もあるから、訪問せやと真家氏

に誘はれて行く。生憎、翁も主人も不在だったので、残念ながら此所を去り、それより藤井貝塚を探り（真家氏発見）行方村に古墳石棒の露出せるを見、井貝貝塚から小高貝塚に出でた。

小高貝塚の名は、地名表に出て居らぬ。無論真家氏と、それから井坂氏との発見と云わねばならぬ。二氏の探検は37年中である。

側高神社の神官、宮崎都氏も、考古の趣味に富んで居て、採集の石斧類に珍品が少くない。庭の築山の一部に土器が利用してあるなど、余の好き心を動かすのである。

氏を訪問して採集品を一見し、箱庭の中に用いてある磨石斧を一個乞い受け、それより氏の先導にて附近を一周し、大石棒の頭部一箇の寄贈を受けた。

宮崎氏の話に、小高村南の羽生元太郎という人が、先度畠地から石塔と一所に六部の花立を掘出したという話を聞き、さらば一見を乞わんとて行き見ると、高さ三寸、八角形。銅製鍍金の經筒で、天文十一の銘ある物。早速それを請い受けた。

此所で真家氏と決を合ひ、車を急がして牛堀の千歳屋に着いたのは日の暮れぐれ。其夜八時の汽船で、佐原に渡り、金田一泊。あくる日帰京。」

とある。この書物は非常に楽しい遺跡の発掘記で江見は何度も茨城県に足を搬んでいる。文章中の行方村の古墳がどこであるかは詳しく調査していないので具体例を示すことは出来ないが、いずれの機会に調査したいと思う。また真家國松氏は北浦村中根在住の教員で当時は津澄小学校長であったらしい。

大場磐雄も真家氏を訪ねてこの辺を採集している。彼の採集は『楽石雜筆』に詳しい。『楽石雜筆』は大場が大正7年から死亡するまで書きつけた日記で、その巻三に「常陸方面行」という大正9年7月29日から8月7日まで遺跡巡査をした記録を残している。真家氏から教示されたことも含めて麻生町関係の遺跡とに、次の様なものがあげられている。

- 「大和の駒形神社の御神体はもと埴輪土馬なりしが、某氏採集せるため今はなし。
- 小高側鷹神社の神体は大石棒なり。それには100年「きぬきせ」といいて一丈余の布をまきつける式ありという。
- 大石棒の所在地次の如し。

小高村井貝谷貝塚付近

大和村岡平貝塚付近

麻生大宮神社

- 小牧の井窪の貝塚へ行った。ここは2ヶ所ある。1つは小学校の裏手、1つは薬師様の裏手である。共に貝が多い。土器は厚手と薄手を混じている。朱塗の破片があった。ここで少し発掘したが何も得ず、畠で小磨石斧をひろい、それから鬼越へといった。夕方鬼越貝塚を少しほって骨器をとったが地主がどなるのでやむなくひきあげた。」

とある。大場も楽石雜筆の中で何處か真家氏を訪ねている。そして北浦村繁昌の鬼越貝塚を発掘している。

発掘調査として本格的なものは、昭和3年8月に池上啓介が行った麻生地区の大宮台貝塚であろう。彼は『史前学雑誌3-4』に「常陸國麻生大宮台貝塚調査報告」という詳しい記録を残している。それによると貝塚は大麻神社の西北約200mの北西畠地を中心にA, B, C, D, Hの5地点にわかれしており、H地点を発掘したとある。紙幅の関係上調査の詳細については省略するが「少年期の人骨1体」を中心多くの遺物が発見されている。その他の遺物は、獸骨（イノシシ、シカ、タヌキ、クジラ）、魚骨（スズキ、クロダイ、ヒラメ、マグロ、イカ、フグ）、貝殻（ハマグリ、バカガイ、オキシジミ、アサリ、サルボウ、オホノガイ、シオフキ、マテ、カキ、ナミマガシワ、ツメタガイ、アカニシ、キセルガイ、マルタニシ、ニナ）

石器（磨製石器4、打製石器3、石皿片6、石錐5、砥石1）骨角器（骨鈎3、角器未製品2）貝器（貝輪未製品6）土製品、（土錐2（土器片））、土器（出土せる土器は何れも縄文式土器に属し、出土量は豊富であったか完全に近いものは大形の壺形土器一個を得たのみで他は全部破片である。）

と報告し、塚之内式土器片が図示されていれる。後期の貝塚であることがわかる。そして最後に池上は次の7点を本貝塚の調査の結果として結んでいる。

- 〔1〕 本貝塚の位置は地理的環境に非常に恵まれてゐる。
- 2) 本貝塚は小貝塚よりなる貝塚群にして、其の内容は若干相違あるものの、大局に於て当方面の諸貝塚と近似関係にあり、少なくとも特種の貝塚ではない。
- 3) 検出し得た貝殻及び魚骨も現生のものに就いて其の習性を見れば、2, 3の例外はあるが、大部は浅海、内湾・淡水の多少流入する等の条件を一様に有す。これ等は当時の当地方に於ける地理的環境を暗示する。又特に魚採方法を推断するが如き特異な習性あるものも在しない。
- 4) 魚骨は特に河豚が多く然も燃かれたものが多く遺存せる事実は食料に供せられた事を推想せしめ、且つ彼等の文化は有毒物を或程度まで処理し得たとの念想を抱かしめる。
- 5) 埋葬せる完全なる少年期の人骨一体を出土してゐる。
- 6) 土器以外の人工遺物は少ない。
- 7) 土器は形態変化に乏しく、紋様の多くが沈線で直線紋と曲線紋の両者によって意匠せられている。」

この報告は本町における最初の学術報告であり、麻生町の貝塚を日本考古学界に紹介した最初の記録である。そうした点では麻生町にとって大宮台貝塚は最も重要視されねばならない遺跡である。

次は昭和30年8月学習院大学が小高村南の塚之内貝塚を発掘調査している。しかし残念なこと

にその報告は研究者にさえ手に入れることが出来ず、その成果は公表されなかった。

私が目にしたのは最近「麻生の文化」20に飯島正彦氏が当時の記録を公表されたものである。これも麻生町にとってきわめて貴重な記録である。

昭和33年8月には大森信英によって南古墳が発掘調査され、昭和37年発行の『日本考古学年報11』にその概略が公表されている。全長30mの小形の前方後円墳で、次の様に報告されている。

「古墳は全長30m、前方部幅11m、高さ3.5m、後円部径20m、高さ4.5mの前方後円墳で堀ではなく、封土上には埴輪円筒をめぐらすほかは葺石その他の設備はない。主体部は後円部主軸線上、墳頂下約50cmより65cmにかけて、南東～北東に、主軸線に、正角に発見された。石室は全長2m、幅65cmの竪穴式石室で、残存石室の深さは約15cmである。石室は水成岩の薄板を用いたと考えられ、風化がいちじるしく、北西部壁に扁平石塊を残すのみで、南東壁には粘土内に痕跡をとどめるにすぎない。前方部での主軸線下約45cmの地点に主軸線に平行に全長1.5m、幅40cmの後円部石室と同質の石材をもって構築した。竪穴式石室状の遺構を発見した。」

麻生町の古墳についての最初の調査報告であるが、学界から顧みられることは殆んどなかった。それは学界が関東地方で竪穴式石室が存在しないことを知っているからである。調査担当者は盗掘をうけた箱式石棺の裏込め石と粘土を竪穴式石室と判断したためである。しかし本古墳は最近埋葬施設の位置の問題で再び話題となりつつある。この問題についてはいずれ詳述したい。

昭和34年8月には大森信英によって小高の大塚古墳が発掘調査され、一辺32cm、高さ4.5mの三段築成の方墳として報告された。しかしこれは近世の塚の可能性が強い。『日本考古学年報12』に簡単な記録がある。

昭和51年12月から翌3月にかけて丸子亘によって小牧石堂遺跡が大和第一小学校新築によって発掘調査された。繩文時代と奈良時代の複合遺跡といわれ、昭和53年3月報告書が刊行されたが専門家には殆んど読まれることがなかった。しかし麻生町にとっては最初の事前調査といえる。

昭和60年3月には根小屋古墳群の4号、13号墳が桜井二郎によって発掘調査され、同10月31日には報告書が刊行されている。2基共に盜掘されており、良好な資料を手にすることは出来なかつた。

以上が麻生町の考古学の成果がある。常陸国風土記にみえる歴史と伝統のあるこの町も今や砂利採取がいたる所で行われている。遺跡の保護よりも私達には開発最優先が目につくのである。そうした中には記録すらせずに破壊されているものも多い。行政の手でバランスのとれた開発を指導して欲しいと願うのは、この町で生まれ育った私のノスタルジアばかりではない。

(茂木)



## 第二章 調査の経過

### 第一節 調査に至る経過

今回調査の行なわれた公事塚古墳群は、麻生町大字小高字公事塚に現存し、県遺跡台帳にも記載されている周知の遺跡であり、町にとっても重要遺跡の一つである。現在円墳3基が登録されているが、この地は古く常陸國風土記に記されている「鯨の岡」として言い伝えられている。

昭和61年7月（株）栗原工務店より土砂採取工事に係る埋蔵文化財の所在の有無および取扱いについて照会があり、ただちに遺跡台帳と照合確認後、現地の踏査を実施した。この結果、照会のあった開発区域に円墳2基が含まれることを確認。

同年10月町教育委員会から栗原工務店に対し、文化財保護の立場から、遺跡の重要性を考慮し、現状保存を前提とする協議を重ねたが意向は変らず、発掘調査を実施してほしい旨の相談をうける。

以後約2年間、県文化課及び教育事務所の諸先生方のご指導をいただきながら遺跡の取り扱いについて検討を重ねた結果、昭和63年6月町文化財保護審議会の承認を経て、発掘調査により遺跡の記録保存を図ることで合意を得る。これに伴い、調査方法、経費、調査会発足等について事前協議を行い、関係書類等の提出に至った。

昭和63年7月、麻生町教育委員会根本教育長を会長とする19名の公事塚古墳群発掘調査会が発足し、調査の取扱いに関する協定書及び委託契約書の審議が行われ締結がなされた。さらに、茨城大学茂木雅博教授を調査主任とする発掘調査団が結成され昭和63年7月20日から昭和63年10月3日の期間で調査が実施された。

（高野 裕）

## 第二節 発掘調査の経過

公事塚古墳群の発掘調査は、昭和63年7月14日から、昭和63年10月3日にかけて、3次にわたり実施した。

第1次調査では、1号墳（円墳）、2号墳（前方後円墳）の墳丘測量をし、第2次調査では、1号墳、2号墳の発掘調査、第3次調査では、下層住居遺構（積屋）を中心に調査を行った。

以下、調査経過の概略を述べていきたい。

△第一次調査（昭和63年7月14日・15日）

【7月14日】

11時作業開始。業者に依頼してあった水準点が来ていないため、1号墳に、レベルポイントを置き、平板測量を進める。串打ちを行い、1号墳においては、並行して、平板に落とす作業を行う。雨のため、3時に作業中止。

【7月15日】

前日に引き続き、測量を行う。1号墳、2号墳とも、-250cmまでの串打ち終了。平板に落とす作業は、雨のため、予定より遅れる。墳丘表面の弥生式土器、土師器等の土器片を採集する。7月16日、17日も、作業続行の予定であったが、雨のため第1次調査は、2日間で中止。

△第二次調査（昭和63年7月20日～9月6日）

【7月20日】

午前中宿泊所となる霞月の清掃を行う。午後から1・2号墳とも串打ちと並行して平板に落としながら測量を行う。2号墳では東西南北にトレンチを設定する。

【7月21日】

1号墳では引き続き測量を行う。午前中に測量が終了した2号墳では、午後より東西のトレンチを掘る。1m掘り下げ自然の砂と判明。墳丘西南1/4をユンボで削り取る。墳丘下西側で住居遺構が見つかる。休息所の設置。

【7月22日】

1号墳引続き測量作業。串打ちは終ったが、平板に落とす作業が遅れている。2号墳、墳丘南西部より多数の土器片と金銅製の耳飾りが出上る。

【7月23日】

1号墳、平板に落とす作業を続行。2号墳は、墳丘下西側に東西南北、幅80cmのトレンチを入れる。前方後円墳の可能性あり。墳丘北側トレンチで壺・高杯などの破片が数カ所でまとまった形で多数検出される。途中小雨があり、1号墳での作業は中止となる。

### 【7月24日】

2号墳の調査を進める。墳丘裾南西部を拡張する。後円部と思はれない溝が確認される。溝の外側より須恵器・平安鎌倉期の土器片が検出される。

### 【7月25日】

2号墳北側トレンチ（北第1トレンチ）をベルトを残し拡張する（北第2トレンチ）。土器片が多数まとまった形で検出される。完形の壺形土器がベルト内より検出。墳丘裾西側でトレンチを拡張し、測量を行う。

### 【7月26日】

2号墳北第1・2トレンチのセクション図作成。写真撮影のためトレンチ内の清掃。ベルトを取り除く。北トレンチ内で何らかの祭りごとが行れたと思はれる土器群が検出。墳丘裾西側では企環が1ヶ検出される。墳丘南部の住居跡でピット群が検出される。

27日・28日は雨のため作業中止。

### 【7月29日】

2号墳の北側トレンチを掘り下げる、写真撮影のための清掃をする。トレンチを拡張してみるが、新たな遺物は確認できない。トレンチの土器群検出のため、エレベーション、実測図を作製する。

### 【7月30日】

1号墳は、墳丘測量を完了し、東西南北のトレンチを設定する。2号墳の第1トレンチでは、セクション図を作製。また、住居跡のピット、かまどを掘り進めたところ、砾石を検出する。

### 【8月1日】

1号墳頂部に2m四方のグリッドを設定し、掘り始める。数片の土器検出される。2号墳住居跡のカマドの実測図を作製し、ベルトをはずす。また住居跡の西壁セクション図を作製する。土浦市立博物館塙谷修氏、国学院大学院生米川仁一氏と来訪する。

### 【8月2日】

1号墳、墳頂部グリッドを掘り進める。2号墳住居跡のピットのセクション図作製途中で、雨のため、11時30分で作業中止。

### 【8月3日】

休日

### 【8月4日】

1号墳、墳頂部グリッド3-bより、鉄刀が出土する。

【8月5日】

1号墳、墳頂部グリット3-bを中心に、埋葬施設確認のため、1-b, 1-c, 2-C, 3-A, 4-Cグリットを掘り始める。

【8月6日】

1号墳、墳頂部を掃除し、セクション図作製のため、土層を精査する。また、墳丘下部より、繩文式土器の底部が出土する。

【8月7日】

1号墳、墳頂部グリットの北壁セクション図を作製後、写真撮影のための掃除をする。並行し、墳丘南東区の盛土を削り始める。2号墳セクション図作製し、また、主軸断面のセクション図完了する。

【8月8日】

1号墳、墳頂部3-bグリットを中心に、写真撮影のため、掃除をし、1-a, 2-a, 4-aグリットを掘り始める。

【8月9日】

1号墳、墳頂部グリットの掃除をする。墳端確認のため、東トレンチを延長する。

【8月10日】

東トレンチを掘り進め、墳端を確認。また、墳丘南東区において進めていた掘り下げ作業は、旧表土に達した。

【8月11日】

雨天のため、作業中止。

【8月12日～8月17日】

お盆休み

【8月18日】

1号墳、2-c, 3-b, 4-bグリッドの掃除をしていたところ、3-bグリッドより、新たな剣、ガラス玉、鉄片が出土。2-a～2-cグリッド東壁、3-a～3-cグリッド東壁のセクション図を作製するが、雨のため、作業が中断する。

【8月19日】 1号墳、1-c～4-cグリッド北壁、1-b～4-bグリッド北壁セクション図作製と並行して、ベルトをはずしていく。また、3-a～3-cグリッド東壁、2-a～2-cグリッド東壁のセクション図を、ベルト除去後、作製し、完了する。ベルトをはずしたので、最終的に、3-bグリッドを中心に、6m四方のグリッドとなる。その中で、木棺の大きさを確認するため、粘土層や、鹿沼土を探すが、発見できない。土色により、主体部の長さを4mと推定する。雨のため、作業が思うように進まない。

### 【8月20日】

主体部確認のため、写真撮影。主体部の輪郭に沿ってベルトを残し、主体部を竹ぐし、竹べらで掘り下げる。推定した主体部を裏づけするような土色の変化は確認できなかったが、ガラス玉、琥珀玉、管玉、勾玉、鐵鎌、鉄片が出土。玉類は20個を超す。勾玉、管玉、ガラス玉等出土によって、南枕で埋葬されたことが判明。

### 【8月21日】

剣の半分を内包していた主体部北東部のベルトを剣のレベルまで掘り下げる。この剣は、短剣であることが判明。

### 【8月22日】

表土を除去した墳丘の測量を半分程終える。円墳になりそうである。主体部を掘り下げていくと、臼玉、琥珀玉が出土したので、実測図を作製する。

### 【8月23日】

引き続き、主体部を掘り下げる。竹ぐし、竹べらでの作業なので、ゆっくりと進行していく。写真撮影の後、土器、鐵劍、鐵鎌等を収集する。昨日から進めていた、削りだした墳丘の測量完了。やはり、円墳と思われる。周辺確認のため、西トレンチを掘り進めるが、証明するような遺構、遺物は発見できない、北トレンチから、有孔円板出土。

### 【8月24日】

主体部の実測図作製後、再び、掘り下げていく。引き続き、西トレンチ、北トレンチを掘り進めていったところ、北トレンチから、有孔円板と、その原石、および竪穴状の落ちこみを確認する。

### 【8月25日】

主体部南西出土の土器片の実測図作製。昨日に引き続き、北トレンチより、有孔円板が出土する。雨のため、10時に作業中止。平岩俊哉氏今日から調査に加わる。

### 【8月26日】

西トレンチ北壁セクション図作製。主体部の実測図も完成させる。北トレンチより、臼玉出土。また炭化物が表れたので、住居跡かもしれない。南トレンチを掘り始めたところ、剣形品出土する。雨のため、2時に作業中止。稲村繁、生田日和利氏今日から調査に加わる。

### 【8月27日】

西トレンチ北壁セクション図完成。東トレンチ北壁セクション精査。主体部東部より臼玉122個出土。雨のため、作業が中断される。

### 【8月28日】

南北トレンチ東壁セクション図作製。竪穴を一度埋めた後墳丘を構築している様子。墳丘北側の半分を刷りとると、方形の住居跡が現れる。弥生式土器出土。南トレンチでは、剣形品、主体

部北東部では、臼玉25個が出土。国学院大学院生米川仁一氏参加。

#### 【8月29日】

南北トレンチ東壁セクション図作製。東西トレンチ、南北トレンチ写真撮影。西トレンチと東トレンチのベルト北壁を崩したところ、埋葬施設と方向を同じくして、鉄剣が出土。実測図作製したところ、蛇行剣の可能性有。東トレンチ覆土から、軽石製砥石出土。服部文季氏今日から調査に加わる。

#### 【8月30日】

鉄剣を検出する。茂木先生の体調と、天候により、作業を中断することとなる。墳丘表面の土器を拾集した後、発掘用具を洗い、宿舎に戻る。宿舎の清掃を行い、全員帰宅する。

#### 【9月2日】

出土鉄器（直刀1、剣2、鐵鎌2束）を東京国立文化財研究所へ持参する。

#### 【9月6日】

鉄鎌の状況検査のため、古墳周辺の地下水・墳丘封土を東京国立文化財研究所へ郵送する。

△第三次調査（昭和63年9月26日～10月3日）

#### 【9月26日】

1号墳北側トレンチ東壁のセクション図を作製。ユンボで墳丘北東側の土を削る。中央部の住居跡を検出。

27日、28日は雨のため作業中止。

#### 【9月29日】

住居跡内を、東西・南北にベルトを残し、4区分して掘り進める。焼上がかなりみうけられた。土器片出土。

#### 【9月30日】

住居跡床面まで掘り進める。木炭・焼土が一面に見られる。東西・南北のベルトのセクション図作製。ベルトを取り除く。平板に住居跡を落とす作業をする。

#### 【10月1日】

住居跡から殯屋跡として調査を続行する。床面より柱穴ピット・貯蔵穴と思われるピットを掘り始める。貯蔵ピット・柱穴ピット完掘後、図面を取る。各ピットより土器が多少出土。ピットI付近にて滑石製剣形模造品が検出される。柱穴ピットの木炭、殯屋内の部分写真を撮る。

#### 【10月3日】

本日発掘終了日。昨日に引き続き殯屋内の図取りを行う。殯屋内を清掃し、写真撮影を行う。遺物を取り上げ発掘終了する。

(廣木 直美・近藤 則子)

### 第三章 調査概要

公事塚古墳群は第2図の位置に現在は2基存在するのみである。しかし既に触れた通り土取りが進行し、どれも完全ではなく、かなり墳丘の周辺が削りとられたり、残土によって盛り上げられたりしていた。調査時点では地形も変形しており残された地形を測量することは出来なかった。そこで1～2号の位置関係を第2図で示すにとどめておきたい。

私達は西側の先端部分を1号墳、東側を2号墳と呼称して調査を実施した。

#### 第一節 一号墳の調査

西端に築造された円墳で採土のために墳丘上の樹木は全て伐採され、裾部には土砂採取後に埋め土に使用するための土砂が盛られ、旧状を知ることは殆んど出来なかった。

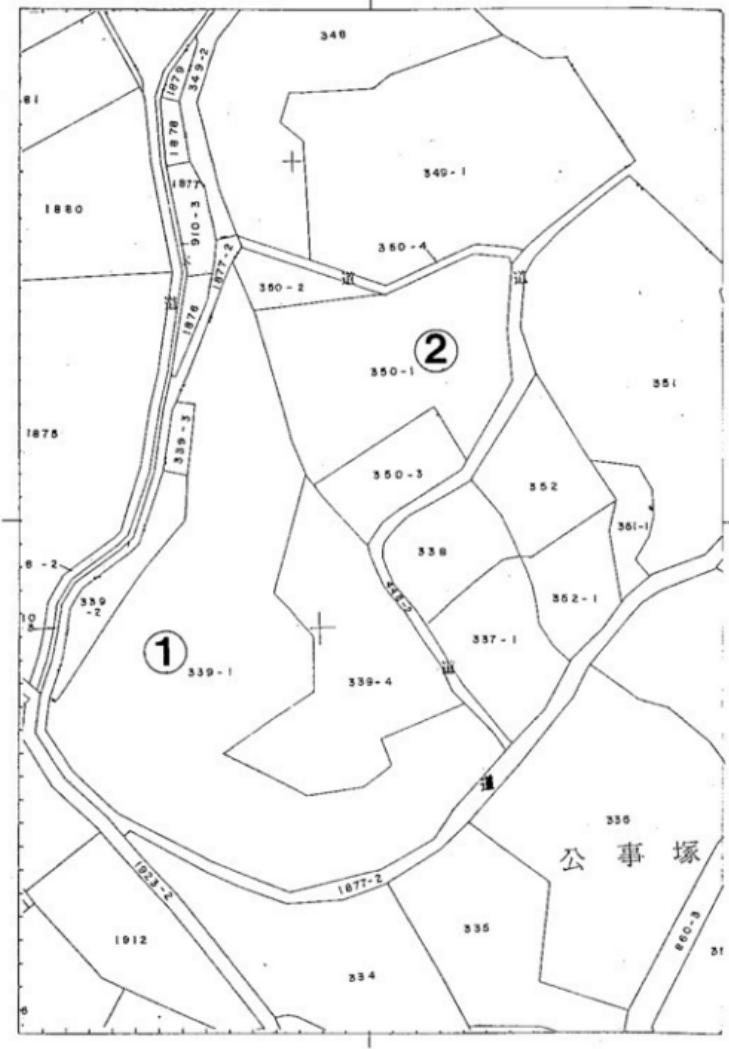
旧状は僅かに水田に面した北西側のみが残り、周隣の存在などは全く確認出来なかった。

墳頂部の最高点は海拔24.234mで、墳頂平坦部の南西側にあるが、線を結ぶことは出来ない。測量の結果墳頂部からマイナス25cmに直径9mの平坦部があり、墳丘の高さは4.20m、直径約27mである。なお墳丘の北西側は急勾配であり、正確な直径は不明である。

土砂採取がはじまる前には東側に難壇状の畝が存在したといわれるが、発掘開始時は直土によって水平であった。しかし南北に設定した墳丘切断トレンチでは、北端で現表土下2m程で地山に達しており、北側も墳丘は急な坂であったことが知られる。

いざれにせよ発掘調査開始時の状況からは、墳丘の旧状を理解することは出来なかった。

墳丘にこそブルドーザーが入ることのなかったが、その周辺部は北側を除いてかなり搅乱されていた。



第2図 公事塚古墳群地籍図（1：1000）

### 測量による墳丘の状況（第3図）

墳丘の測量は25cmの contour lineによって行った。その結果（第3図）墳丘の東北側の裾部にかなりの変形が図示された。

しかも段築ではなく、埴輪片や葺石等も全く認められなかった。この地方の円墳としては直径に対して、墳丘が高く、図示された墳丘からは、五世紀段階の古墳の可能性が考えられた。比較的旧状をとどめている墳丘西側を観察すると2.25mから2.75mにかけてcontourに変化がみられるこことを注意する必要があった。また東側では確認出来ないが、段築の可能性も考えなければならないかも知れないと実側中に記憶しておかねばならなかった。

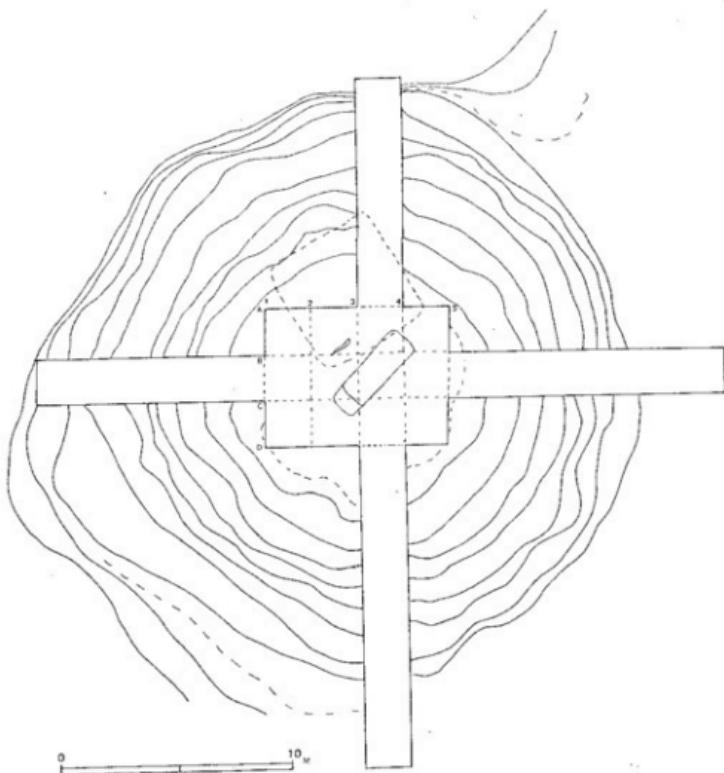


第3図 一号墳墳丘実測図

#### 調査区の設定（第4図）

墳丘の形状からこの地方に多い箱式石棺を埋葬施設として予想することは不可能であった。粘土枷か木棺直葬を想定して墳頂部を精密に調査する必要があると考え、調査区を設定する。

第2に外表土器群と円筒埴輪の存否を確認すること、特に5世紀代の円埴を想定することが可能であれば、霞ヶ浦沿岸において未だ解明されていない時期の古墳である。そのため墳丘の表土を最大限取除くこと。



第4図 一号墳調査区及び遺構配置図

第3点は墳丘西側の-2.25~2.75mまでのゆるい傾斜のcontourが何を意味するのか等を解明するための発掘区を設定することにした。第1の問題についての発掘が能率良く進むことをさけるためにペナルティーを与えることである。そこで墳頂平坦部に一区2mのグリットを12個設けて表土以外は移植ブテを使用することにした。

第2については墳丘の南西区を除いて墳丘表土を全て除去することにした。

第3については墳丘の中心部に東西30m、南北30m、幅2mの直交するトレンチを設けて墳丘を地山まで切り取ることにした。

以上の発掘区を設けて発掘調査を実施した。この結果、私達が当初調査計画段階では想定出来なかった墳丘下遺構が南北トレンチ北側から発見されることになった。そのためここでは墳丘築成前の遺構、墳丘の築造、埋葬施設の順で報告することにした。

#### 墳丘築造前の遺構（第5図）

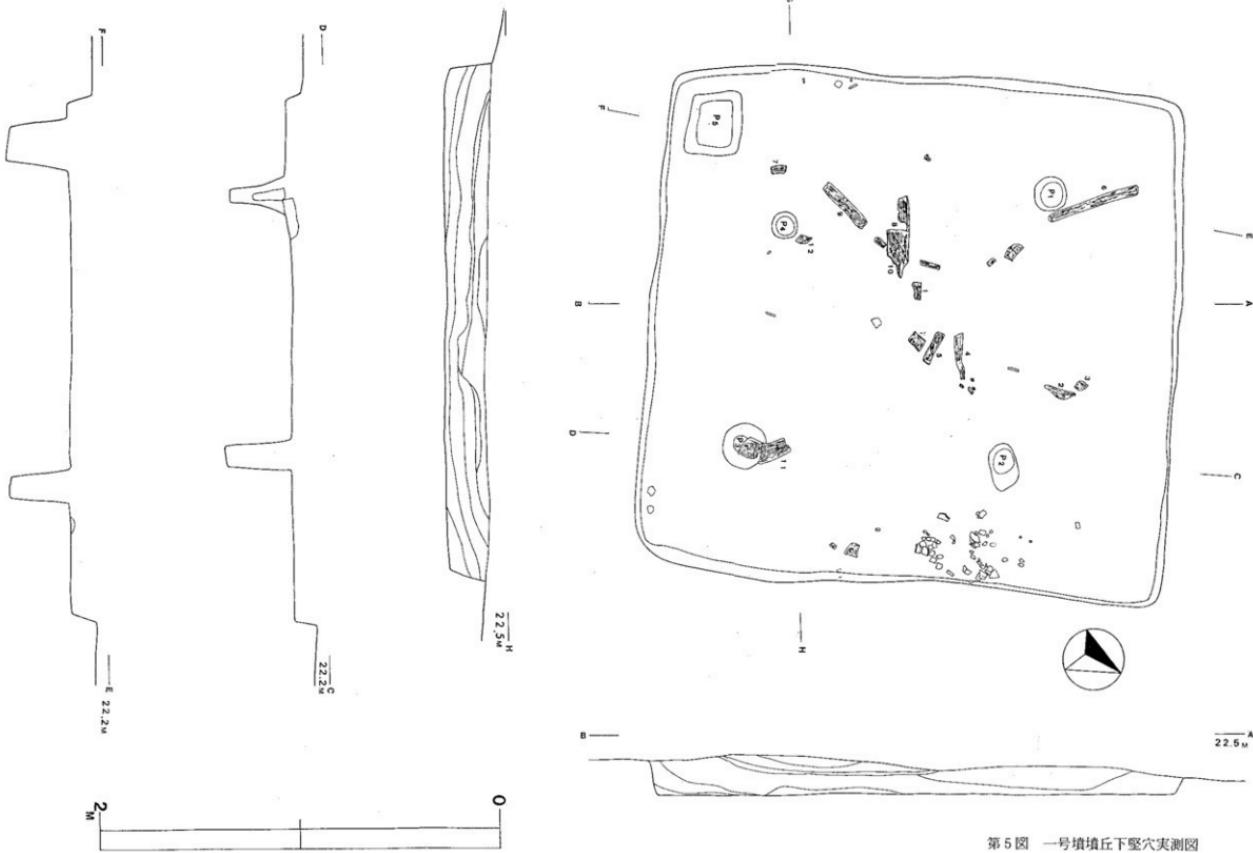
南北トレンチ北側において墳丘下の地山面から竪穴式住居跡状の落ち込みが確認され、滑石製有孔円板や土師器壺が検出された。

しかも発見された土師器は片で和泉期の新しいものであり、古墳の埋葬施設周辺で検出されていた土師器片と同時期のものであったために、調査終了後、墳丘を除去してその下を調査した折、墳丘築造以前に地山を東西16m、南北15m程水平に削り残して、その北側に竪穴状の遺構が築造されていたことが明らかとなった。それは墳頂下1.7m程の地山を南側で50cm、北側では10cm程掘り下げて水平とする竪穴状遺構で主軸をS30度Eとするもので長辺5.3m、短辺5mを有するものである。この遺構には全面的に焼土が充満し、多量の炭化木材が発見された。焼土の堆積状況は壁面では床面ではなく、壁穴中央では床面が赤く焼ける程度であった。炭化木材は焼土下にあり、柱や垂木及び屋根材と見られる板で、カヤ等は全く認められなかった。従来の調査からすれば、これだけの焼土に包まれた遺構の場合、カヤの炭化物がかなり多量に検出されることが通例である。私はこの竪穴はカヤ壺ではなく、NO10の炭化物がかなり幅広い板材であったことから、板葺き屋根を想定した。

木炭と焼土以外に遺物は殆どなく僅かに剣形品2、有孔円板5、臼玉1が床面から発見され、僅かに土師器片が床面に散乱していたのみである。

柱穴は4本あり、いずれもほぼ垂直に掘られており、p3には炭化した木材が残されていた。壁の周間に溝はみられず、南西コーナー部に方形のpitが存在した。

この遺構が竪穴式住居状の遺構であることは明確である。しかし地山の状況から判断して他に住居跡の存在は考えられない。墳丘下の地山を平坦にした北寄りにこの掘立柱の竪穴住居は作られ、床面の状況からそれほど踏みかためられずに焼き払われて、墳丘の築造が行われていること



第5図 一号墳丘下堅穴実測図

が墳丘の断面図から考えられるのである。墳丘中から発見された滑石製品と床面から発見されたものも石材の質と製作技法から全く変りないのである。

以上の点から板蓋の殯屋であった可能性が考えられる。しかしこうした類例は他にあまりみられないで、詳しいデータを紹介しておくことにした。

### 墳丘と殯屋の位置関係

第4図に示したように墳頂部には2m四方のグリットが12個設定されていたために、墳丘を除去してもこれは最後までおさえることが出来た。このグリットは磁北にあわせて設定したために、トレンチは全て磁北に合せて設定された。その結果墳丘下の殯屋は墳丘全体の北寄りに設けられ、殯屋の短辺と埋葬施設の主軸方位がほぼ一致していることが知れる。

地山面の加工を考えるとこの住居跡状遺構が墳丘と直接関係ないとするならば、ここに切断された住居跡が存在しても良いはずである。しかし墳丘下にはこの遺構以外に認めるることは出来なかった。しかもこの遺構面が切り込まれるための墳丘下旧表と見られる黒色土は存在せず、整地された地山面を切り込んで竪穴が掘られている。

竪穴は、やや隅丸方形で、東壁5m、西壁5m、南壁4.8m、北壁4.8mのプランを有し、南西コーナー部に長辺60cm、短辺50cm深さ60cmの貯蔵穴が掘っていた。柱穴は現則正しく4本が掘られその規模はp1直徑25cm、深さ30cm、p2直徑30cm、深さ35cm、p3直徑45cm×30cm、深さ30cm、p4直徑45cm、深さ30cmである。これらはp3を除いて床面から垂直に掘られている。床面は中央部がややしまっている以外はあまり踏みかためられていない。

### 遺物の出土状況

殯屋を連想するこの竪穴遺構にはあまり遺物は残されていなかった。最も多かったのは床面に散乱した土器片で165片である。これは6片の弥生式土器片を除いて全て土師器である。土師器片は床面以外では貯蔵用pit内から31片、p1内より3片、p2内より3片、p3内より1片をそれぞれ採集した。これらは北東部に比較的多く、床面全体に散乱するというものではない。特徴的なことは器形の複原出来たものは1点（第16図-⑦）で他は全て2次的な火によってろくなっている。器種は壺及び高壺片が多く、次に壺と思われる破片で煮沸の用途を有する器種は含まれていない。

土器片以外では滑石製品で有孔円板5、剣形品2、白玉1点で、剣形品1点を除いて北東部床面よりまとめて出てきた。しかしこの附近では床面らしい踏み込みはみられない。

南西部で発見された剣形品（第20図①）は二次的な火をうけたためにもろくクリーニング中に折れてしまった。

床面からの遺物はこれらの外に建築材と思われる炭化材がある。これらはp4の柱の残りを除いて部分的に残されているのみであり、詳細は知り得ない。後項に農林水産省森村総合研究所の須川豊伸氏の報告をいただいたので参照していただきたい。

### 墳丘の築造法（第6図）

墳丘下の建築物が、墳丘と関連するものであるとすれば、当然それは墳丘の断面図にあらわるはずである。

占墳の調査は埋葬施設を第一に考え、次に墳丘築成の調査、そして墳丘下の遺構と行われる順序である。この報告では調査とは逆の順序で記録している。

埋葬施設の調査と並行して行われた墳丘築成状況の調査は、墳頂部のグリット部分を残して墳丘の周囲から行い、最後に埋葬施設下の墳丘中央部を切断して、岡上で墳丘断面を継ぎ合せた。

南北トレンチの北側を墳丘下まで掘り下げて断面を観察したところ、墳丘の築造方法が、この地方のそれとはあまりかわりないが、気がかりな点があった。それは第6図の北側部分にかなり落ち込んだ土層があり、これをどう解決するかということであった。特にこの部分の土砂は褐色のかなり硬い山砂を使用しており、あまり類例をみない土層である。

周囲の南側は同一レベルでもほぼ水平に盛土がみられることを考えるとやや不自然であった。

この落ち込みは東西トレンチではみることが出来なかった。さらに南北トレンチ北側の墳丘下地山面よりも低いレベルから有孔円板5、臼玉1、剣形品1等が検出されていたので、トレンチ発掘の段階では、墳丘築成前に行われた地鎮祭的な行為を連想した。

墳丘は殯屋？を比較的硬い土砂で埋めたあとで、水平積みしたものと考えられる。

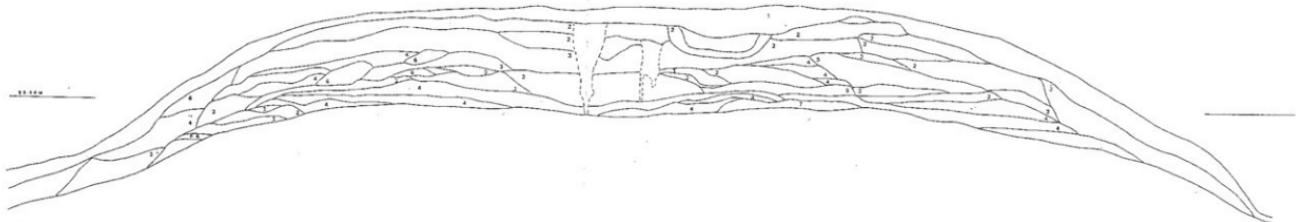
それは第6図を読めば明らかである。そこでこれら2枚の断面図によって、その土層を詳しく検討しておくことにしよう。

### 南北トレンチ断面図による検討（第6図⑧）

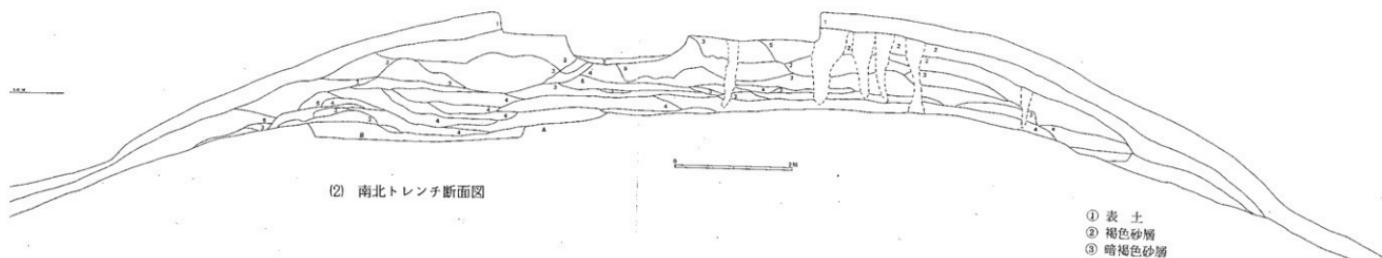
Aは地山である。通常はこの上に旧表土と呼ぶ黒色土があるが、本墳の場合それは全く認められない。要するに本墳の場合は地山をかなり削り取って整形され、その面に殯屋？を作ったものと思われる。この地山は褐色砂層で比較的硬い。しかも地震によると思われる亀裂がいたるところにみられる。

北側Bが殯屋の落ち込みである。この落ち込みは墳丘盛土にはみられず、地山を整形してから切り込んでいる。

明らかに墳丘を築成する以前に殯屋が埋められていることは、第6図②の殯屋内の土砂の堆積状況から知ることが出来る。この堅穴が自然にうもれたのであれば、覆土は全体的に粒子が密で



(1) 東西トレンチ断面図



(2) 南北トレンチ断面図

第6図 一号埴埴丘断面図

- ① 表土
- ② 褐色砂層
- ③ 暗褐色砂層
- ④ 黒褐色砂層
- ⑤ 暗灰褐色砂層
- ⑥ 黄褐色土層
- ⑦ 旧表土

あるか、ここの場合にはかなりあらい砂である。しかも黒色に近い土砂は全く含まれていない。

この部分を除けば南北トレンチは比較的整然とした水平積によって墳丘が盛りあげられている。

墳丘の土砂は全体的に砂を使用している。しかも鉄分が多く含まれ、墳丘の流出が防止されたものと思われる。このトレンチの土の性質を検討すると、墳丘の中央部の盛土はかなりしまった硬い性質のものを使用している。表土やその下層の一層はやわらかい砂であるが、墳丘の中に入ると全てかたくしまった砂が用いられている。硬くしまる砂を芯にして、その外側にやわらかい砂で覆った様に墳丘が構成されている。埋葬施設はその硬い土砂上におかれ、ソフトな砂で覆われていたといえる。

#### 東西トレンチ断面図による検討（第6図(2)

このトレンチでの観察は、南北よりも水平積を明らかにすることが出来る。ここでも表土及びその下層を除けばかなりしまった土砂によって墳丘が構成されている。

霞ヶ浦沿岸の古墳としては、これだけ墳丘に多量の砂を使用して墳丘が構成されている例はあまり聞かない。しかもこの断面図のように整然と水平に積まれた古墳もありないことを記しておきたい。

（茂木）

#### 主体部の調査（第7図）

1号墳の埋葬施設は、墳頂部で確認された。木棺直葬である。

埋葬施設の調査は、墳頂平坦部に設けた東西8m、南北6mの大グリットをさらに2m四方の小グリットに分割してそれぞれ掘り下げるという方法を採用了。各グリットにおいて微妙な土層の変化が認められた結果、それを追求した所、埋葬施設の南東壁を確認した。それは現在の表土から50cmであった。しかも墳丘中央よりやや東に偏した位置である。

調査が進むにつれて土壌内の覆土が砂質で封土と似ているため一部では掘り下げてしまう地層もあらわれた。

また埋葬施設の掘り方の検出にも充分気をくばったのであるか確認することは出来なかった。

木棺の主軸は、N45°Eと正しく北東方向を指し、長軸4.22m、北東端部1.18m、南西端部1.15mを計測することが出来た。その深さは北東端21cm、南西端23cmである。なお棺内の覆土に変化はなく、単一であった。具体的には次の様に観察された。

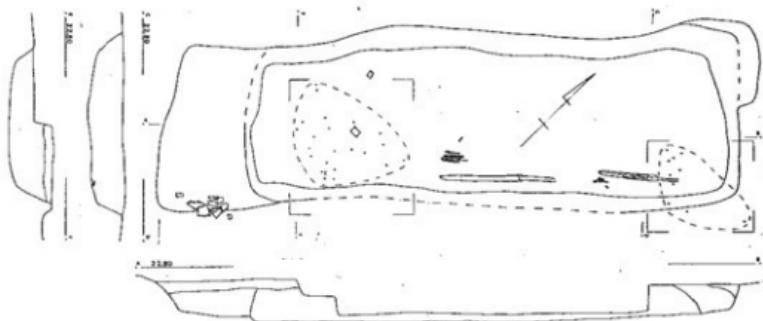
第1層、粘着力があり、比較的しまった暗褐色砂層

第2層、第1層と同じ性質と思われるか、より粘性があり、しまりの強い暗褐色砂層

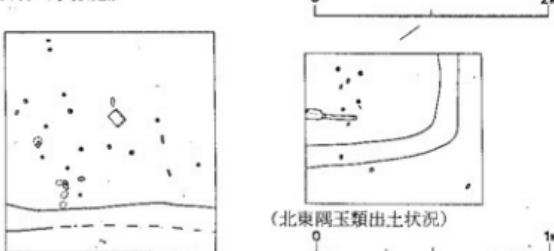
第3層、かたくしまるか、あまり粘性のない褐色砂層

第4層、ソフトな暗褐色砂層

なおこの部分に棺材は遺存していなかったが、棺床部の様相から断面が浅いU字状を呈している点を考慮すると、剖竹形の木棺が推定されるが、木棺の規模から考えると、床面の丸味から浮島原1号墳の主体部を想定すべきかと考えることが正しいのかもしれない。



第7図 主体部実測図



遺物の出土状況

埋葬施設となる主体部からは鉄剣1、直刀1、鉄鎌7本、玉類が発見された。

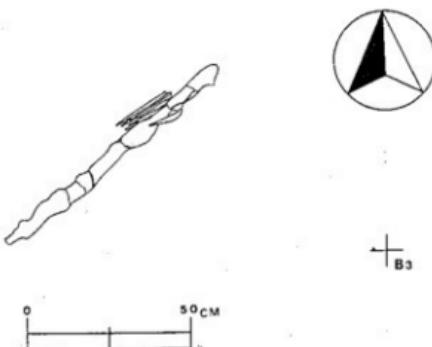
剣及び直刀は南東壁に沿った位置にあり、北側に劍・直刀とあり、棺底におかれたものと思われる。両者共茎を北東方向に切先を南西に向け、直刀は刃部を棺外に向けていた。

鉄剣は直刀の切先付近の内側にあり、鋒を南西に茎を北東に向けた状態でおかれていた。

玉類は南西と北東の2群から発見され、北東側からは滑石製白玉群が、南西部はガラス、琥珀等の首飾りと見られるものが集中して発見された。

さらにこれらの埋葬施設とはやや場所を異にする北西側から蛇行状を呈すると見られる剣1と鉄鎌数本が発見されたが、その造構については確認することが出来なかった。第2主体部も設定されるが、それらしい痕跡を確認出来ず遺物のみを採取した。（第8図）

（小沢）



第8図 主体部北側鉄剣出土状況

## 第二節 二号墳の調査

本墳は1号墳の北東約70mに墳丘中心点をおく円墳状の墳丘である。墳丘裾部の北東は土取りによって20m位垂直に削り取られており、墳丘の裾部を測量のために歩行することさえ危険な状況であった。さらに南側には1号墳同様に埋土用の土砂が積まれて水平になり、墳丘の旧状を知ることが出来るのは南西側の一部にすぎなかった。また北西裾には以前の作業用小径の痕が残り一部変形していた。そのために発掘調査にはかなりの制約があり、完全な記録を残すことは出来なかった。

### 測量の結果（第9図）

墳丘の測量はベンチの移動が遅れたために1号墳頂を0として、同一レベルで行った。

本墳の墳頂は1号墳よりも25cm高い。(24.484m) 南側裾部にはマイナス350cmのcontour lineが走るが、375cmになると置き土のため線を結ぶことは出来ない。また北側では225cmの線を結ぶことが出来ない。

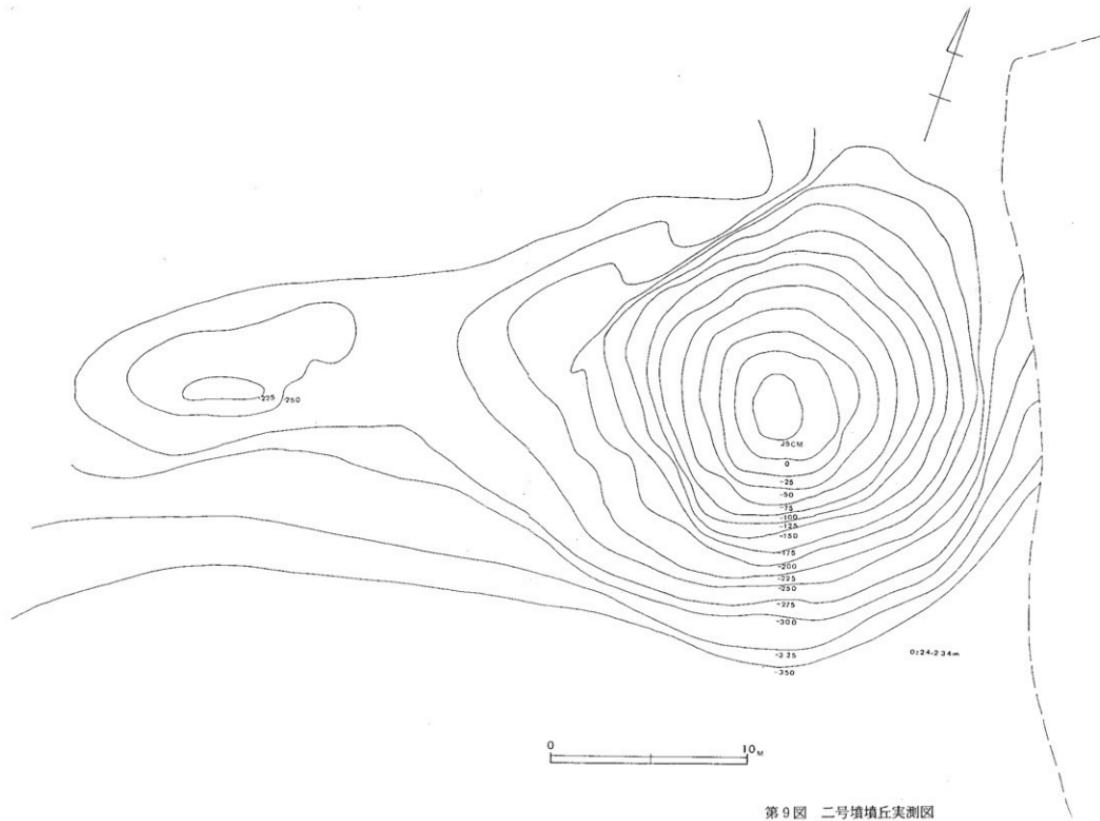
その結果墳丘を一周する最低線はマイナス200cmである。実測図でもわかる様にこの墳丘は正円をなしておらず、墳丘の北西側ではどちらかといえば方形を想定出来る。しかしこの部分は山径および一部畠として使用されていたといわれ後世の変形が考えられ、墳丘の東側に残る円形のcontour lineを重視する必要がある。

裾部の変形を考えても直径20~25mが想定される。ただし円墳とするには問題が残る。

それはマイナス 225cm と 250cm の西側裾部の contour が突出することと、275 cm 以下 350cm までの線が西側にのびていくことである。この線が生きているとすれば西面する前方後円墳が想定される。しかし自然地形の残る北西側には伐採された樹木が山と積まれており、また一部地形の観察出来る丘陵端では前方後円形を想定することはかなり不自然である。第 9 図西側を一応前方後円墳と想定して図化してみた。

しかし南側はブルドーザーが歩いたために地表は攪乱され、測量は不可能であった。旧状を復元することは第 9 図が精一杯であった。

この図によると西側を前方部とすることにはやや抵抗もあるが、あえて認めるにすれば全長 50 cm の前方後円墳であったことも想定しなければならない。しかし私は北側の地形と南側があまりにもふつりあいであったので、これを前方後円墳と考えることはしなかった。

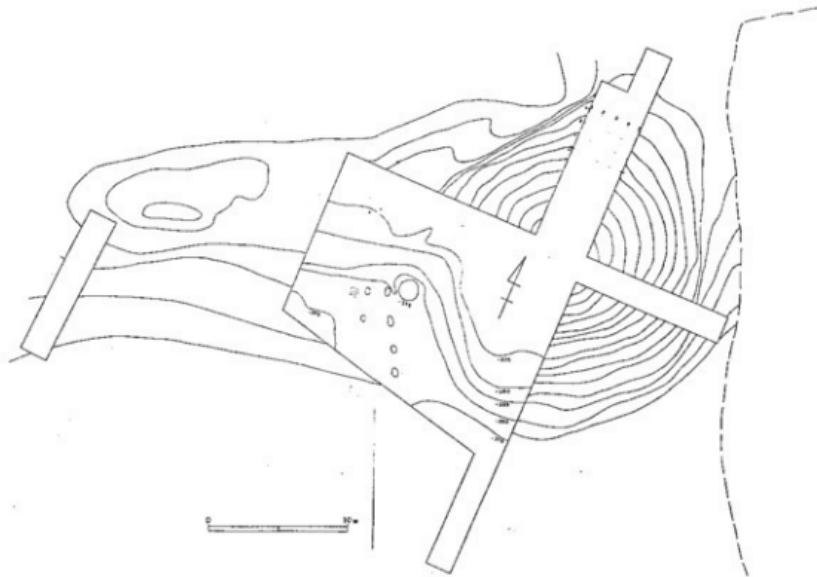


第9图 二号墳填丘実測図

そこで墳丘にともないcontour lineは-275cmまでとして、西側の2本の線を帆立貝の造り出しの可能性を想定する調査区を設定して、直径25mの円墳で高さ3.25mを測量の結果と判断した。しかし墳丘が砂を主体としており、地元の人々の伝承が鳥打ち山といって、古墳ではないといわれており、調査はこの砂山が人工的な墳丘であるか否かを最初に検討することであった。それには盛土であるのか、周障は存在するのかという2点を最初に明らかにせねばならなかった。

#### 調査区の設定（第10図）

測量の結果-250cmのcontourが西側で突出することを考慮して、これが墳丘であった場合帆立貝式前方後円墳も考えられるために調査区を設定した。東西30m、巾2mのトレンチと、墳丘中央部に南北40m、巾2mの直交する2本のトレンチを設定した。これは墳丘が砂層のために人工的な盛土であるのか、それとも自然丘であるのかを確認するためである。南北40mのトレ



第10図 二号墳調査区見取図及び遺構位置図

ンチは南側に盛り上げられた土砂を機械で除去することも考えて、350cmのcontoreから10mも延長した。人工的な盛土であるためには、4隅のいずれかで周辺を確認することであった。

基本的に直交する2本のトレンチによって次の調査区を設定することにした結果南北トレンチ北側でトレンチの西に幅2m、長さ12mの拡張区を、さらにクロスする墳丘の南西部分を全て除去することになった。

特に墳丘南西部を除去した結果、削り取られた西側に前方部が想定されたために実測図の補足を行い西側に幅2m長さ11mのトレンチを設定することにした。

### 調査結果

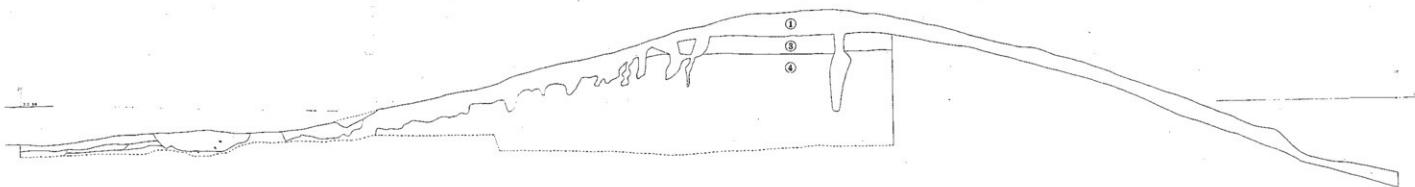
発掘調査は最初東西トレンチから実施した。

東側は裾部が急崖をなすために周辺の確認を最初から断念して、墳丘のみとし、西側は特に隣を確認出来る最も良好地点と判断した。

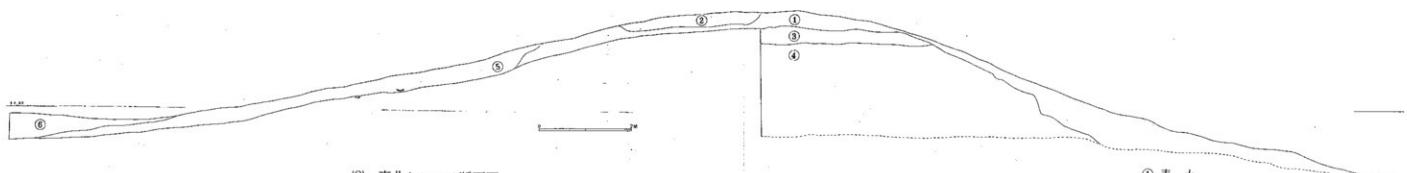
しかし第11図に示したように30cm足らずの部分で地山砂層に達しこの部分で裾部の現表土からの切り込み以外に隣を確認することは出来なかった。第11図でもわかる様に墳丘は現表土下20cmで褐色砂層となり、特に墳頂ではこの部分に鉄分を含む水平の砂層がみられ、人工による盛り土を観察することは不可能となった。このことは東側においても同様で、墳丘を20~30cm掘り下げると鉄分を多く含む褐色土となり、この地方では類例をみない砂による地山削り残しの感が強い。

そこで東西トレンチはこのレベルで作業を中断し、南北トレンチを調査することにした。

このトレンチでも南側は全く同様であり、無遺物であったため、北側の発掘を中止して、トレンチを整査して、記録を残すこととした結果、両トレンチの裾から金環1ヶが突然出土した。全く遺構をともなわず、かつて畠として耕作した際、境界の溝を掘ったといわれその溝中からの出土であった。そこで中止していた北側のトレンチを掘り上げたところ、墳頂から6mほど北へ行った附近から土師器、壺片、高环脚片、坏片等が確認され、西壁附近にも坏、壺片等があり、さらに西側に拡がることも予想されるため、西側に幅2m、長さ12mの拡張区を設けた所第12図の様に土師器が発見された。



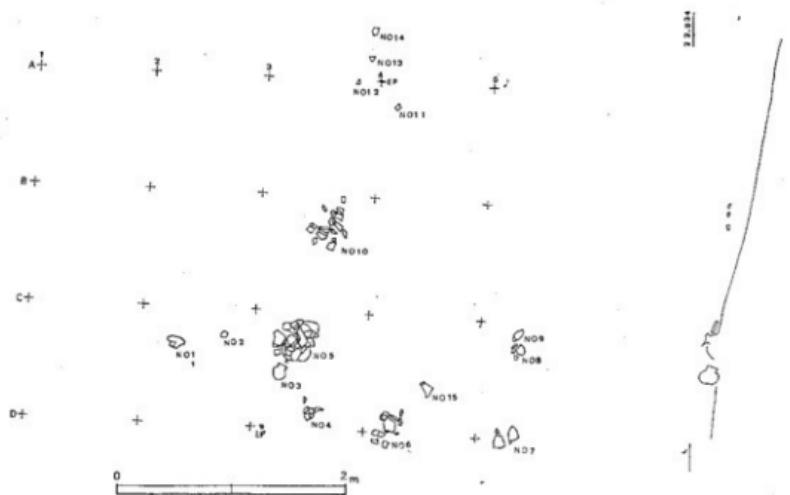
(1) 東西トレンチ断面図



(2) 南北トレンチ断面図

第11図 二号墳埴丘断面図

- ① 表 土
- ② 暗褐色土層
- ③ 茶褐色砂層
- ④ 黄褐色砂層
- ⑤ 暗褐色砂層
- ⑥ 客 土



第12図 二号墳墳丘北側土師器出土状況

これらは砂質上におかれており、NO 5を中心に行等かの祭祀が行われたものである。特にNO 5は甕を中心として、その周囲に焼土が認められ、甕の口径部には高壙がふたに使用されていた。これらの土師器はナンパリングしてとりあげたがその器種及び接合関係とレベルは次の通りである。

出土No	器種	上場レベル	下場レベル	接合関係
1	坏(6片)		22,529	5片接合
2	甕片(1片)		22,534	
3	壺	22,723	22,572	
4	甕片(7片)		22,624	
5		22,714	22,524	甕1, 盆1, 高坏2, 坏2
6	甕片, 壺片(4片)	22,704	22,444	底部3片接合, 脊部5片接合
7	盆13片	22,744	22,694	13片接合
8	坏6片		22,474	5片接合
9	坏4片		22,509	2個体, 2片接合
10	甕27片	22,514	22,422	9片接合
11	甕崩片2片		22,114	接合
12	甕1片		22,064	
13	甕1片		22,094	
14	坏1片		22,084	
15	高坏脚		22,575	No.5高坏接合

この表でもおわかりのようこれからの土師器群は、墳頂から6m～8mの範囲内に集中するものが10個で、NO11～NO14は流出したものである。置かれた地層が砂の上であるために遺構を検出することは出来なかったが、この周辺のみが全体的に有機質が多かったために、ある程度フラットな部分を作りおかれたものと思う。NO6の下場レベルが22.444mであるのに対して下位に位置するNO10が22.424であるのをみるとある程度想定される。

そしてNO5の下位にはそれほどしっかりしていた訳ではないが、明らかに焼土が確認されており、しかもここに土師器が集中することを考えると、NO6, NO5, NO10にかけてが祭祀の中心をあらわしていると思われる。

この土師器群の出土によってこれが単なる自然の地彌れではなく、人工的に作られたものであることが明らかとなつたために、墳頂部に残しておいたやや粘着力のある灰白色の砂混りの範囲

を追求したが何ら遺構を検出するに至らなかった。そこで最後の手段としてこれがはたして人工的な盛り土か、自然丘の利用かを知るために西トレンチと南トレンチを掘り下げた所、どこも自然の砂山におおわれたために機械によって墳丘の南西全てを除去して調査した結果、墳丘は自然の砂丘を残したという結論に達したために、南西裾部に埋葬施設の存在を確認するため、第10図の如く土砂を除去することにした。結果的には埋葬施設を発見することは出来なかった。

#### 墳丘南西裾部の中世遺構（第10図参照）

本墳の南西側裾部には既に触れたように大量の山砂が盛られていたために墳丘端部の隣の存否を確認するには、機械力にたよる外なかった。砂利採取用のブルとユンボによって土砂を除去し、墳丘に直交させたトレンチの西側と南側に狭まれた部分を全て除去した結果、第16図のような遺構が検出された。その範囲は東側18m、西側12m、南側20m、北側18mの範囲内である。それより南側は土の置場がなく調査することは出来なかった。

この部分を-275cmまで除去し、それ以下はそれぞれ地山面まで掘り下げた結果が第10図である。南北方向に4本の柱穴が列び、砂層地山が加工されており、墳丘に関連する隕は全く確認出来なかった。地山の加工は前方後方形のクビレ部状を呈するが、これは柱穴を伴う遺構に関連するもので古墳とは無関係である。柱穴は南北方向に4本みられる以外はその北西に2本あるのみで、いずれも直接掘られたもので素掘りである。柱穴は地山床面から掘られ、床面はほぼ水平でこの附近にカマド跡と思われる焼土の一部があり、そこから内耳土鏡片数点が発見された。また鉄器を研ぐのに使用された名倉磁片が発見されており、柱穴と鍋等から中世末期の遺構と考えられる。しかし調査区が狭く、しかも土砂の採取によって地形が変形してしまったためにこの遺構の全体像を把握することは出来なかった。

戦国期の出丸様遺構が存在したものと思われることだけを記録しておくことにしたい。

なおこの遺構の調査中北西寄りの-275mの先きに金環を検出した地点より、やや小さな金環を再び発見する。前回同様遺構の痕跡は全く認められない。この附近には鬼高峰期の新しい土師器片も認められ、住居跡の存在も予想されたが不詳である。

（茂木）



## 第四章 出土遺物

### 第一節 土器

#### (1) 弥生土器について

今回の調査で出土した弥生土器は、その大部分が1号墳の盛土内及び1号墳埴丘下の住居跡覆土内より出土したものである。これらは、すべて破片資料であるが、以下、器面の文様を中心に分類しその概要を紹介することにする。

#### A群（第13図1～11、13）

これらは、沈線文を主体とする土器群である。すべて小破片であり、器形を復元することは困難であるが、主に壺形土器、甕形土器の肩部から頸部にかけての破片と思われる。1、3は、単線の縦沈線文で、1は起状の少ない連続山形文、3は綾杉状の文様である。1は、精選された胎土で器面は赤褐色を呈し、2は、胎土がやや粗く淡褐色を呈している。

2、5、7は、二本同時施文具による沈線文で、それぞれ渦文・横位、縦位組合せの平行文・横位の平行文が施されている。5、7は精選された胎土で、2はやや粗く、黒褐色、淡褐色を呈している。

4、6、9、10、11、13は、3本同時施文具による沈線文で、重四角文と思われるものや、連続山形文、弧文、平行文、連弧文等が施されている。13は、7本の多条沈線文による縦区画内を3本同時施文具による斜格子文で充填している。10、11の沈線文は、3本中1・2本は非常に浅いものである。4は、3本の沈線を二列に施し、6条の連続山形文、弧文を描出している。全体的に比較的精選された胎土で、淡褐色、褐色を呈し、焼成も良好である。

#### B群（第13図12、14～21、第14図1）

これらは、4条以上の多条沈線文を主体とする土器群であり、施文具の相違から沈線が細く浅いもの（8、12、14、15、16、17、19）と、幅広で浅く間隔の狭いもの（18、20、21、22）とに細分される。A群同様、主に壺形土器、甕形土器の肩部から頸部にかけての破片と思われる。

前者のうち、14、16、17、19は五本同時施文具により横位の平行沈線文を施しており、3段以上5段まで確認される。なお、14では、沈線文下に断面三角形の突帯が貼付されている。12、15は、五本同時施文具による平行文・斜行文の組み合わせ、あるいはくずれた連続山形文状の沈線文を施している。

後者は、すべて四本同時施文具により横位の平行沈線文あるいは波状文を施している。20, 21には、平行文と波状文、平行文と平行文の間に繩文原体の連続した押捺文が施されている。

全体的に精選された胎土で、焼成も良好、褐色、淡褐色を呈している。

#### C群（第14図2～6）

これらは、23～25の口縁部、26, 27が口縁部下端から頸部にかけての破片である。口縁部は、貼り付けによる複合口縁状を呈し、刺突文、押捺文を持つことを特徴としている。

23は、口縁部下端に等間隔に棒状工具による押捺文を、また複合口縁部には附加条第一種の左下がりの斜繩文を施している。24, 25は、複合口縁部下端にさらに隆起線が貼付され、棒状工具による押捺文が施されている。26, 27は、口縁部繩文帯と頸部無文帯の間に棒状工具による刺突文が施されている。

全体的に精選された胎土で、焼成も良好、暗褐色、淡褐色を呈している。

#### D群（第14図7～12）

これらは、繩文の充填された壺形土器、あるいは壺形土器の胴部破片である。

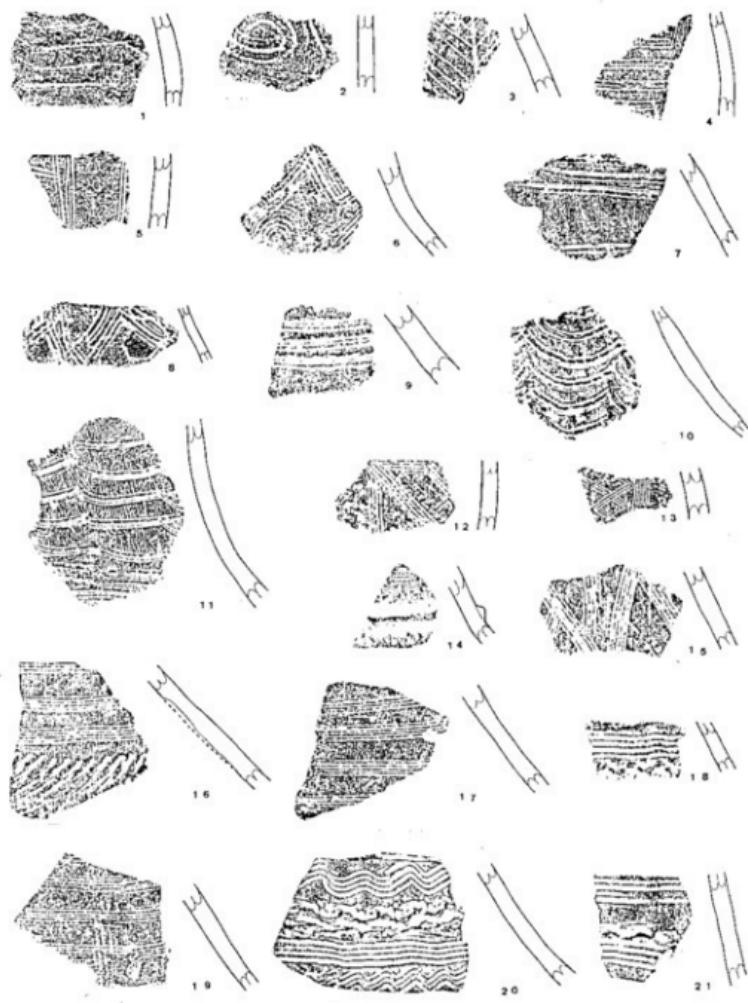
28, 29は、羽状構成をとる横方向に回転させた繩文で、28, 27は附加条第一種の原体を、29はやや太めの原体を用いている。31は附加条第一種の左下がりの斜行繩文、32は、単節の左下がりの斜行繩文である。33については、擦り戻し状のものと思われる。

全体的に精選された胎土で、焼成も良好、暗褐色、淡褐色を呈している。

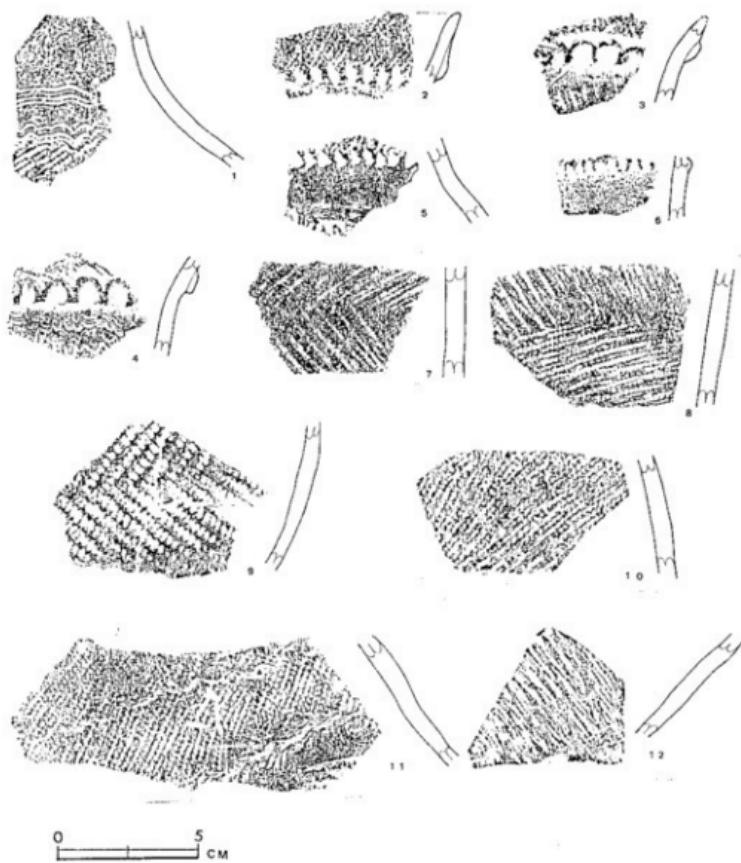
以上、検出された弥生土器についてA～Dの5群に分けてその概要を紹介した。これらは、すべて小破片のため全体の様相を把握することは困難である。最後に、文様およびその工具の特徴から推察される編年的位置付けについて述べてみたい。A群は、単線あるいは、二・三本同時施文具による連続山形文、弧文、平行文、連弧文等の沈線文を主体とする文様構成から、東北南奥地方の系統を引く足洗式土器の影響下にあるものと思われ、弥生時代中期後半に位置付けられるものと思われる。

また、B・C群は、多条の平行沈線文による横方向の平行文、波状文、複合口縁部への繩文の充填及び刺突文、押捺文の施文の特徴から、弥生時代後期前半長岡式併行期のものと考えられるが、B群については、中期末葉まで遡る可能性もある。

D群についてもA～C群の様相からみて、おおよそ中期後半から後期前半の位置付けが妥当なものと思われるが、羽状構成をとるものについては、後期後半まで遡る可能性が考えられる。



第13図 弥生土器拓影(1)



第14図 弥生土器拓影(2)

## (2) 土師器について

### 1. 2号墳出土の土師器

2号墳からは、北側トレンチの墳丘裾部より9個体分の土師器がまとまった状況で出土している。壺形土器、甕形土器、高壺形土器、鉢形土器等があり、それぞれほぼ完全なかたちに復原しうるものである。その出土状況は、直口縁の壺形土器と甕形土器を中心としておよそ4m四方の範囲に、各々の土器がまとまりを持ちながら散乱した状況で出土している。そして、すべての土器が墳丘直上ないしはやや浮いた状況で出土している。おそらくは、葬送祭祀のために供獻されたものか、あるいは祭祀に使用後使い捨てられたものかと思われる。この9個体分の土師器以外にも周辺から数片の土師器片が出土している。

以下、この9個体分の土師器についてその概要を紹介する。

#### 直口縁壺形土器（第15図1）

墳丘直上から、口縁部を裾部に向けて倒れた状況で出土している。完形品である。口径9.5cm、胴部最大径16.3cm、底径5.2cm、器高15.3cmを測る。平底の壺形土器である。口縁部は、やや短めの直口縁で、口唇部は丸くおさめている。胴部最大径は中位にあり、やや扁平な形態を呈している。

器面の整形は、内外ともに板状工具による丁寧なナデ整形を基調としている。

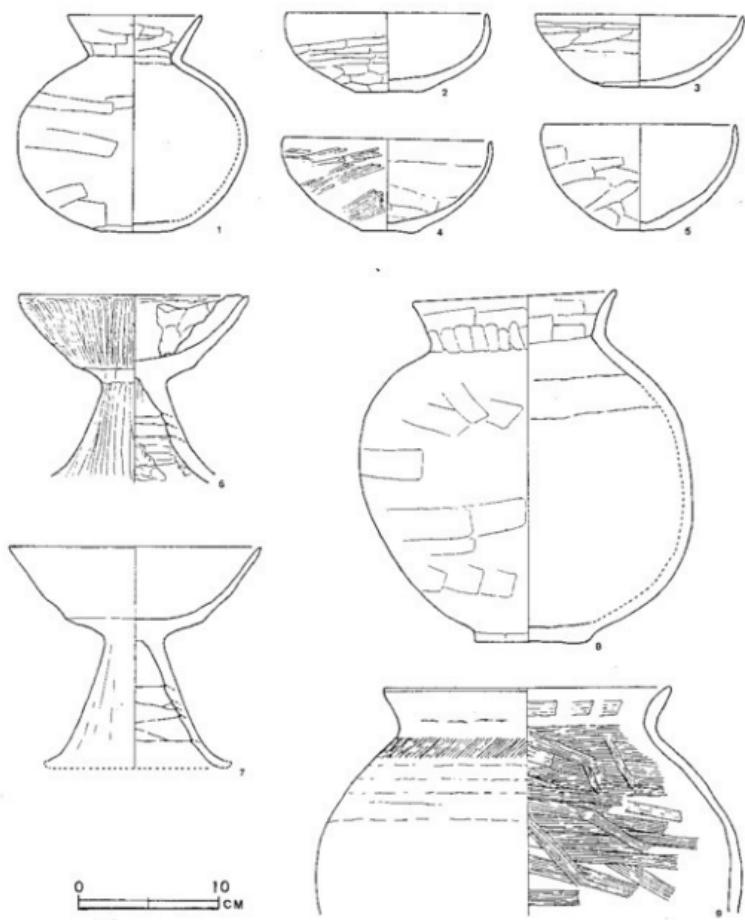
胎土は、微砂粒、金雲母の粒子を多量に含んでいるが比較的精選されており、焼成も良好である。器面、口縁部内面には赤色塗彩が施され、胴部内面は淡褐色を呈している。

#### 鉢形土器（第15図2）

壺形土器の西側約1mのところから出土している。全体の約3分の2が残存している。口径9.3cm、底径5.0cm、器高5.6cmを測る。平底の鉢形土器である。口縁部は、やや内寄り気味に立ち上がり、口唇部は尖り気味におさめている。体部は浅目である。

整形は、口縁部がヨコナデ整形。体部器面が、ヘラによる丁寧なナデ整形を基調とし、内面はナデ整形である。

胎土は、微砂粒、黒色粒子を多量に含み、金雲母の粒子をまばらに含んでいる。焼成はややあまい。器面、内面ともに橙褐色を呈している。



第15図 二号墳出土土師器実測図

### 鉢形土器（第15図3）

壺形土器の東側約1.5mのところから出土している。全体の約3分の2が残存している。口径14.8cm、底径5.0cm、器高5.1cmを測る。平底の鉢形土器である。口縁部は、直立気味に立ち上がり、口唇部は尖り気味におさめている。体部は浅目である。

整形は、口唇部が板状工具によるナデ整形。体部器面が、ヘラによる丁寧なナデ整形を基調とし底部はヘラ削り、内面はナデ整形である。

胎土は、微砂粒、金雲母、黒色粒子を含んでいるが比較的精選されており、焼成も良好である。器面は褐色を呈し黒斑があり、内面は茶褐色を呈している。

### 鉢形土器（第15図4）

壺形土器の北側に接して出土している。ほぼ完形品である。口径14.3cm、底径3.8cm、器高6.4cmを測る。平底の鉢形土器である。口縁部は、やや内弯気味に立ち上がり、口唇部は丸みをもっておさめている。

整形は、体部器面が、ヘラ削りの後、全面ヘラ磨き整形。内面は口縁部ヨコナデ、体部はナデ整形である。

胎土は、雲母等の微砂粒を多量に含み、焼成は良好である。器面、内面ともに赤褐色を呈し、内面には黒斑がある。

### 鉢形土器（第15図5）

壺形土器の東側約1.5mのところから出土している。全体の約3分の2が残存している。口径13.6cm、底径3.3cm、器高7.4cmを測る。平底の鉢形土器である。口縁部は、内弯気味に立ち上がり、口唇部は尖り気味におさめている。

整形は、体部器面が、下半ヘラ削りの後、全体ナデ整形。内面は口唇部ヨコナデ、体部はナデ整形である。

胎土は、微砂粒を多量に含んでいるが比較的精選されており、焼成も良好である。器面は赤褐色を呈し、内面は、茶褐色を呈している。

### 高坏形土器（第15図6）

壺形土器の北側に接して出土している。脚裾部が欠損しているがほぼ完形品である。口径16.4cm、現高13.3cmを測る。中形の高坏形土器である。坏部は、下端に稜をもちや内弯気味に立ち上がり、口唇部は丸みをもっておさめている。脚部は、ハの字状に広がり、内面には輪積み痕、絞り痕が残されている。

整形は、坏部は、器面が全面縦方向のヘラ磨きの後、口唇部ヨコナデ整形、内面はナデ整形の後、ヘラ磨き整形を施している。脚部は、器面が接合部ヘラナデの後、全面縦方向のヘラ磨き整形、内面は横方向のナデ整形である。

胎土は、雲母等の微砂粒を多量に含み、焼成は良好である。器面は淡茶褐色を呈し、内面は赤褐色を呈している。

なお、坏部及び脚部内面には、赤褐色を呈したスサ入りの粘土質の土が付着したまま残存している。

#### 高坏形土器（第15図7）

壺形土器の北側に接して出土している。脚端部が欠損しているがほぼ完形品である。口径17.9cm、現高15.7cmを測る。中形の高坏形土器である。坏部は、下端に稜をもちやや内弯気味に立ち上がり、口唇部は丸みをもっておさめている。脚部は、ハの字状に広がり裾部がやや反りあがる形態を呈するものと思われる。内面には輪積み痕が残されている。整形は、坏部は、器面・内面ともにヘラ磨き整形。脚部は、器面が縦方向のヘラナデ整形、内面は横方向のナデ整形である。

胎土は、雲母、白色粒子等の微砂粒を多量に含むか比較的精選されており、焼成は良好である。器面、内面ともに淡赤褐色を呈し、部分的に黒斑がある。

#### 壺形土器（第15図8）

壺形土器の北側に接して出土している。ほぼ完形品である。口径9.4cm、胴部最大径23.7cm、底径7.9cm、器高25.0cmを測る。平底の壺形土器である。口縁部は、やや厚手でくの字状に立ち上がり、口唇部は丸くおさめている。胴部最大径は中位にあり、ほぼ球形を呈している。

整形は、内外面ともに板状工具による丁寧なナデ整形を基調としており、頸部及び底部器面にはヘラナデ整形が施されている。

胎土は、微砂粒を多量に、小礫を少量含んでいるが比較的精選されており、焼成も良好である。器面・内面ともに明褐色を呈しており、器面にはススが付着している。

#### 壺形土器（第15図9）

壺形土器の北側約1mのところから出土している。胴部下半が欠損し、全体の約2分の1が残存している。口径20.4cm、胴部最大径30.4cm、底径7.9cm、現存高16.0cmを測る。平底の壺形土器である。口縁部は、やや厚手でくの字状に立ち上がり、口唇部は丸くおさめている。胴部最大径は中位にあり、ほぼ球形を呈するものと思われる。

整形は、口縁部が内外面ともにヨコナデ整形を基調としており、器面はその後一部ヘラ削りを施している。肩部器面には一単位5～6本の弱いタッチのハケ整形が施されており、それ以下はナデ整形が施されている。胴部内面には、器面と同様に一単位5～6本の弱いタッチのハケ整形が施され、その後部分的にヘラ削りが施されている。

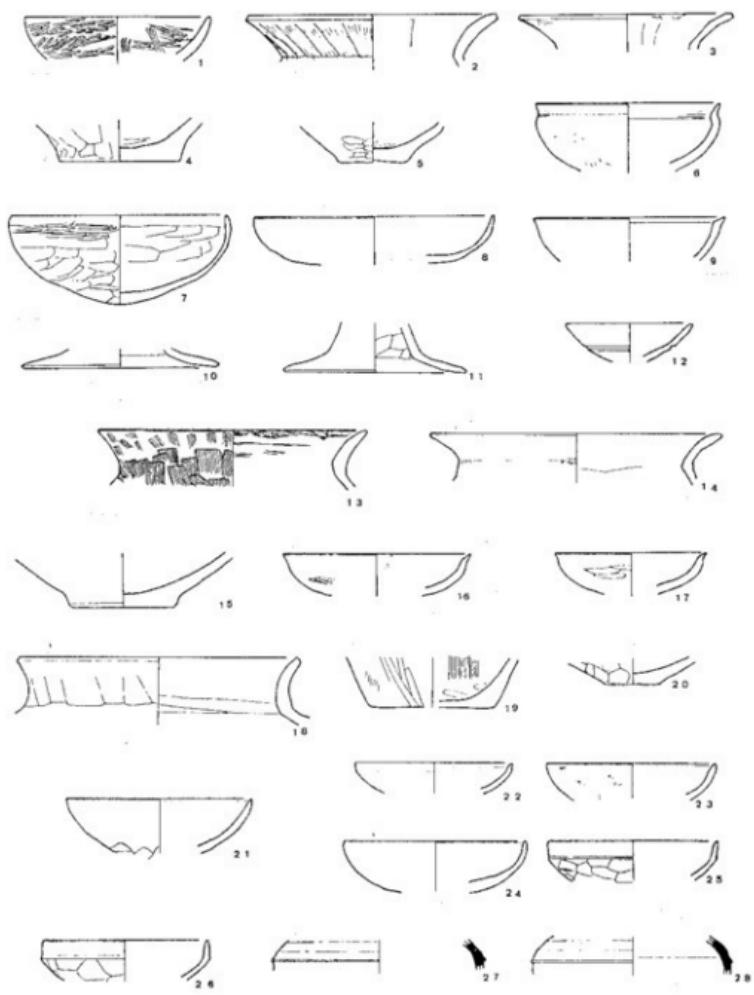
胎土には、微砂粒・白色、赤色粒子を含んでいる。焼成は良好である。器面・内面ともに茶褐色を呈している。

はじめにも述べたように、これらの土器群は葬送祭祀のために使用されたものであり、同時期の一括資料と考えられる。

その観点から見れば、ハケメ整形を残し、くの字状の口縁部や球形の胴部を持つ壺形土器の特徴、あるいは身の深い鉢形土器の平底化が定着している特徴など土器群の諸要素からみて、和泉期・古墳時代中期のなかでも前半代、5世紀中葉を降らない時期の所産と思われる。

## 2. その他の土師器（第16図）

先に述べた2号墳出土の土師器以外にも、調査区内より多くの土師器が検出されている。これらは、1号墳墳丘下住居跡内、1号墳盛土内、2号墳盛土内等から検出されたもので、大部分が細片となったものである。以下、図示し得たものについて一覧表にてその概要を紹介することにする。



第16図 一、二号墳出土土師器片実測図

第1表 出土土器観察表

No	器形	法量	器形の特徴	整形・技法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	壺形土器	口径 13.1 現高 3.2	壺部は浅く、口 縁部が外傾して広 がり、端部を丸く おさめている。	器画・内面とも にヘラ削りの後、 丁寧なヘラ磨き整 形。	微砂粒・黒色粒 子を多量に含むが 精選されている。 器面・内面とも に淡褐色を呈す。 良好である。	6分の1残存。 1号墳墳丘下住 居址床面出土。
2	壺形土器	口径 19.6 現高 3.3	やや厚手の口縁 部は、くの字状に 外反し、端部には 外向する平坦面を 持つ。	器面は、縦方向 のハケ整形の後、 口唇部ヨコナデ。 内面は、横方向 のヘラ削りの後、 口唇部ヨコナデ。	赤色・白色粒子 雲母片を含む。 器面・内面とも に茶褐色を呈す。 良好である。	口縁部4分の1 残存。 1号墳西トレン チ
3	壺形土器	口径 15.0 現高 2.4	口縁部は、外反 して広がり、端部 には、外向する平 坦面を持つ。	器面・内面とも にヘラナデ整形。	白色粒子を多量 に含み、赤色粒子 雲母片を含む。 器面・内面とも に淡褐色を呈す。 良好である。	口縁部4分の1 残存。 1号墳北トレン チ
4	壺形土器	底径 8.6 現高 2.6	底部は、直立氣 味に立ち上がり、 外反して胴部へと 移行する。	器面・内面とも にヘラ削り整形。 内面は、その後ナ デ整形。	赤色・白色粒子 雲母片を含む。 器面・内面とも に茶褐色を呈す。 良好である。	底部のみ残存。 1号墳3Bグリ ッド
5	壺形土器	底径 4.6 現高 2.6	底部は、内青氣 味に胴部へと移行 する。	器面・内面とも にナデ整形。内面 は、その前にヘラ 削り整形。器面の ナデは、指頭によ る。	赤色・白色粒子 雲母片を含む。 器面・内面とも に淡褐色を呈す。 良好である。	底部のみ残存。 1号墳頂下盛 り土内

No	器 形	法量	器形の 特徴	整形・技法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
6	鉢 形 土 器	口径 13.0 現高 4.8	口縁部は、屈曲して広がり、端部は、尖り気味におさめている。	器面・内面ともにナデ整形。口唇部ヨコナデ。	径 3ミリの砂粒 赤色・白色粒子、 雲母片を含む。 器面・内面ともに褐色を呈す。 良好である。	3分の1残存。 底部欠損 2号墳北トレンチ
7	壺 形 土 器	口径 15.3 器高 6.3	口縁部は、内青氣味に立ち上がり端部は、尖り気味におさめている。	器面は、ヘラ削りの後、口縁部下をヘラ磨き、下半はナデ整形。 内面は、板状工具によるナデ整形	微砂粒を多量に含む。 器面・内面ともに茶褐色を呈す。 口唇部に黒斑あり 良好である。	3分の2残存。 1号墳住居跡内出土
8	壺 形 土 器	口径 16.8 現高 3.4	口縁部は、内青氣味に立ち上がり端部は、丸くおさめている。	器面・内面ともにナデ整形。	白色粒子、雲母片を含み、赤色粒子を少量含む。 器面・内面ともに淡褐色を呈す。 良好である。	5分の1残存。 1号墳北トレンチ
9	鉢 形 土 器	口径 13.6 現高 3.1	口縁部は、内青氣味に広がり、端部には、内向する平坦面を持つ。	器面・内面ともにナデ整形。	赤色・白色粒子 雲母片を含む。 器面は、淡褐色 内面は、明褐色を呈す。 良好である。	5分の1残存。 2号墳北トレンチ
10	高 壺 形土器	脚径 14.0 現高 1.3	脚部は、ハの字状に大きく開くものと思われる。	器面・内面ともにナデ整形。	白色粒子を含み 赤色粒子、小砂粒を少量含む。 器面・内面ともに明褐色を呈す。 器面には、赤彩。 良好である。	4分の1残存。 1号墳北トレンチ

No	器 形	法量	器形の 特徴	整形・技法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
11	高 坯 形土器	脚径 13.0 現高 3.5	脚部は、屈曲し てハの字状に開く	器面は、ナデ整 形。 内面は、横 方向のヘラ削りの 後、楕部はナデ整 形。	白色粒子を含み 赤色粒子、小砂粒 を少量含む。  器面・内面とも に明褐色を呈す。 器面には、赤彩。 良好である。	4分の1残存。 1号墳北トレン チ
12	坯 形 土 器	口径 8.5 現高 2.7	口縁部は、直線 的に広がり、中位 に一条の沈線を持 つ。	器面・内面とも にナデ整形。	赤色・白色粒子 径1ミリ程の砂粒 を含む。  器面・内面とも に淡褐色を呈す。 器面・内面には、 赤彩。 良好である。	底部欠損
13	壺 形 土 器	口径 19.0 現高 4.0	やや厚手の口縁 部は、くの字状に 外反し、端部は、 丸くおさめている	器面は、縦方向 のハケ整形の後、 上半をナデ整形。  内面は、上半を 横方向のハケ整形 の後ナデ、下半は ナデ整形。	赤色・白色粒子 雲母片を含む。  器面・内面とも に茶褐色を呈す。 良好である。	口縁部4分の1 残存。 1号墳南トレン チ
14	壺 形 土 器	口径 20.6 現高 3.2	口縁部は、大き くくの字状に外反 し、端部は、丸く おさめている。	器面・内面とも にナデ整形。	赤色・白色粒子 を多く含み、細か い雲母片、径2ミ リ程の砂粒を含む  器面は茶褐色、 内面は暗褐色を呈 す。 良好である。	口縁部5分の1 残存。 1号墳南トレン チ

No	器 形	法量	器形の特徴	整形・技法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
15	壺 形 土 器	底径 7.1 現高 3.4	底部からは、直線的に胸部へと移行する。	器面・内面ともにナデ整形。	白色粒子を多く含み、赤色粒子を含む。 器面は褐色、内面は茶褐色を呈す。 良好である。	4分の3残存。 1号墳墳丘下住居址床面出土。
16	鉢 形 土 器	口径 13.2 現高 3.0	口縁部は、屈曲して広がり、端部は、尖り気味におさめている。	器面・内面ともにナデ整形。口唇部ヨコナデ。器面は一部ヘラ磨き。	白色粒子、雲母片を含む。 器面・内面ともに茶褐色を呈す。 良好である。	4分の1残存。 1号墳墳丘下住居址覆土。
17	鉢 形 土 器	口径 10.8 現高 2.9	口縁部は、屈曲して広がり、端部は、尖り気味におさめている。	器面・内面ともにナデ整形。器面は一部ヘラナデ。	白色粒子、雲母片を含む。 器面・内面ともに茶褐色を呈す。 良好である。	4分の1残存。 1号墳墳丘下住居址覆土。
18	壺 形 土 器	口径 19.4 現高 4.1	やや厚手の口縁部は、大きく外反し、端部には、外向する平坦面を持つ。	器面は、ヘラ削りの後、ナデ整形 内面は、ヨコナデ、頸部はヘラナデ整形。	赤色・白色粒子 小雲母片を含む。 器面・内面ともに褐色を呈す。 良好である。	口縁部5分の1 残存。
19	壺 形 土 器	底径 9.2 現高 3.5	底部からは、直線的に胸部へと移行する。	器面は、ヘラ磨き整形。 内面は、ハケ整形、及び指頭によるナデ整形。	赤色粒子を含み 細かい雲母片、径2ミリ程の砂粒を多量に含む。 器面は茶褐色、内面は暗褐色を呈す。 良好である。	口縁部3分の1 残存。 2号墳

No	器 形	法量	器形の 特徴	整形・技法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
20	壺 形 土 器	底径 3.9 現高 1.5	底部からは、直 線的に胴部へと移 行する。	器面は、ヘラ削 り整形。 内面は、丁寧な ナデ整形。	赤色・白色粒子 小雲母片を含む。 器面・内面とも に茶褐色を呈す。 良好である。	底部のみ残存。 2号埴擴張区。
21	壺 形 土 器	口径 11.0 現高 2.2	口縁部は、直立 して立ち上がり、 端部は、尖り氣味 におさめている。	器面・内面とも にナデ整形。	赤色粒子、雲母 片を含む。 器面・内面とも に褐色を呈す。 良好である。	4分の1残存。 2号埴
22	壺 形 土 器	口径 12.0 現高 2.7	口縁部は、内寄 氣味に開き、端部 は、丸くおさめて いる。	器面・内面とも にナデ整形。	赤色粒子、雲母 片を含む。 器面・内面とも に淡褐色を呈す。 良好である。	5分の1残存。 2号埴
23	壺 形 土 器	口径 13.2 現高 3.8	口縁部は、内寄 氣味に開き、端部 は、丸くおさめて いる。	器面・内面とも にナデ整形。器面 下半は、ヘラ削り 整形。	白色・赤色粒子 雲母片を含む。 器面は、暗褐色、 内面は、淡褐色を呈す。 良好である。	4分の1残存。 2号埴北トレント チ
24	壺 形 土 器	口径 12.8 現高 3.6	口縁部は、内寄 氣味に開き、端部 は、丸くおさめて いる。	器面・内面とも にナデ整形。	白色・赤色粒子 を含む。 器面は、淡褐色、 内面は、黒色を呈す。 良好である。	6分の1残存。 2号埴

No	器 形	法量	器形の特徴	整形・技法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
25	坏 形 土 器	口径 12.0 現高 2.8	口縁部は、直立して立ち上がり、中位に稜を持つ。端部は、丸くおさめている。	器面は、ヘラ削り整形。 口縁部・内面ともにヨコナデ整形	白色・赤色粒子を含む。 器面・内面ともに、淡褐色を呈す良好である。	4分の1残存。 2号墳
26	坏 形 土 器	口径 11.7 現高 2.8	口縁部は、直立して立ち上がり、中位に稜を持つ。端部は、丸くおさめている。	器面は、ヘラ削り整形。 口縁部・内面ともにヨコナデ整形	白色・赤色粒子を含む。 器面・内面ともに、淡褐色を呈す良好である。	4分の1残存。 2号墳
27	坏 蓋 須恵器	最大 径 15.2	浅目の坏蓋と思われる。	器面・内面ともにナデ整形。	白色・赤色粒子を若干含む。 器面・内面ともに、青灰褐色を呈す。	小破片。 2号墳拡張区。
28	坏 蓋 須恵器	最大 径 14.2	浅目の坏蓋と思われる。	器面・内面ともにナデ整形。	白色・黒色粒子砂粒を若干含む。 器面・内面ともに、青灰褐色を呈す。良好である。	小破片。 2号墳

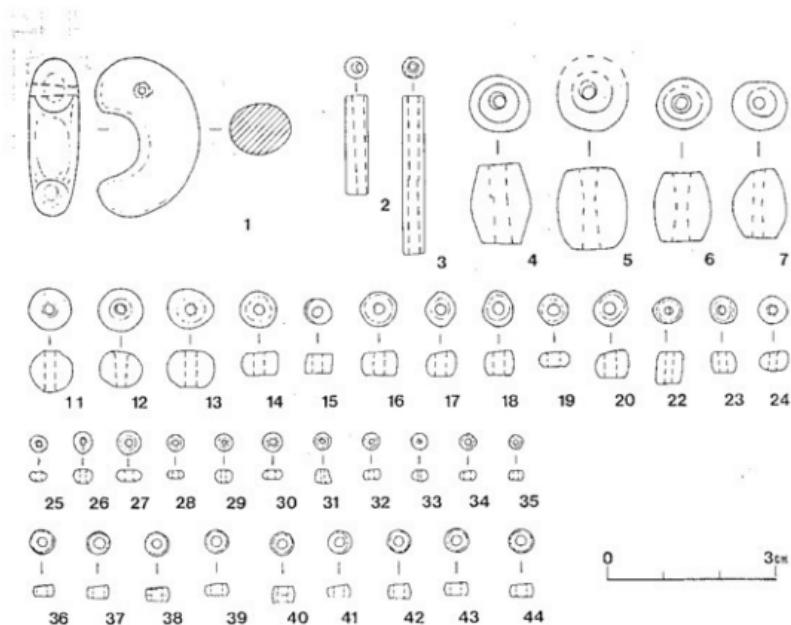
これらの土器は、五領期（古墳時代前期）末から鬼高期（古墳時代後期）初頭に位置付けられるものと思われる。このうち、1号墳埴丘下住居跡出土の土器については、図示し得た1, 15の土器以外にも變形土器等の破片が若干存在する。これら床面出土の上器群を見ると、ヘラ磨きを施した浅目の鉢形土器や、やや直立気味の口縁部を持ち、ナデ整形を主体とする變形土器の様相がその特徴として捉えられる。そして、これらの特徴を2号墳出土の土器群と対比してみると、時期的に若干降るものと思われ、和泉期の中でも後半、5世紀後半頃の位置付けが妥当なものと思われる。

（塙谷）

## 第二節 玉類

主体部出土の玉類は、その出土位置から2群に分けられる。ひとつは棺内南側で検出されており、勾玉・管玉・簾玉・丸玉・小玉・臼玉等種類が多く、装身用の玉類である。一方、主体部北東隅の棺外で検出された一群はすべて滑石製臼玉である。

棺内南側出土玉類（第17図）



第17図 一号墳主体部（南側）出土玉類実測図

棺内南側の一群は、約80cm×80cmと比較的広範囲に散乱した状態で検出されているが、玉類の種類ごとに見るとかなりのまとまりを示している。出土数は勾玉1、管玉2、簾玉7以上、丸玉2、小玉23、臼玉9である。

勾玉(1)瑪瑙製。不純物少なく透明感があるが、内部に亀裂が認められる。横断面は楕円形を呈し、わずかに扁平である。穿孔は片面からで、終孔部には凹みと亀裂がある。仕上げの研磨は丁

寧で、穢はない。

菅玉（2・3）緑色凝灰岩製。2は片面穿孔。開孔部・終孔部ともに凹みはない。研磨による痕が一部に残る。3は2に比べ長く、両面からの穿孔。表面の風化著しい。

棗玉（4～10）琥珀製。4を除きすべて欠損品であるが、7個体以上あるものと思われる。大小2種類あり、最大は6で長さ・径ともに大形である。使われている琥珀にも2種類があり、4が比較的硬く透明感を有するのに対し、他はすべて不純物を多く含んでいるらしく透明感がなくもろい。確認できた個体はすべて両面穿孔である。風化著しい。

丸玉（11・12）ガラス製。大きさは小玉の13と大差ないが、形・小口部の調整に違いを見せる。11・12は球形を呈し、小口部には調整をおこなわない。11の小口には、成形時に芯を引き抜いた際に引っ張られてできた突出がそのまま残っている。また、12は開孔部と終孔部の径が異なる。

小玉（13～35）ガラス製。色調によって紺色系（13～23）と青緑系（24～35）に分けられる。紺色系は径が0.50cm以上が多く、0.40cm未満はない。一方、青緑系は径が0.40cmを越えるのは3個体しかなく、ほとんどが0.30cm前後と小形である。紺色系に共通しているのは、両小口を平坦に調整していることと、卵形・菱形に近いものが多いことである。また、大形の13、管形の15・22を除いて小口は片面が傾斜しており、同一個体内で厚さに差がある。15・22は縫断面が平行四辺形に近い。青緑系は、小口未調整のものと平坦に調整しているものとがある。形は正円形に近いものが多いが、橢円形や胴張闊丸方形のものも含まれる。

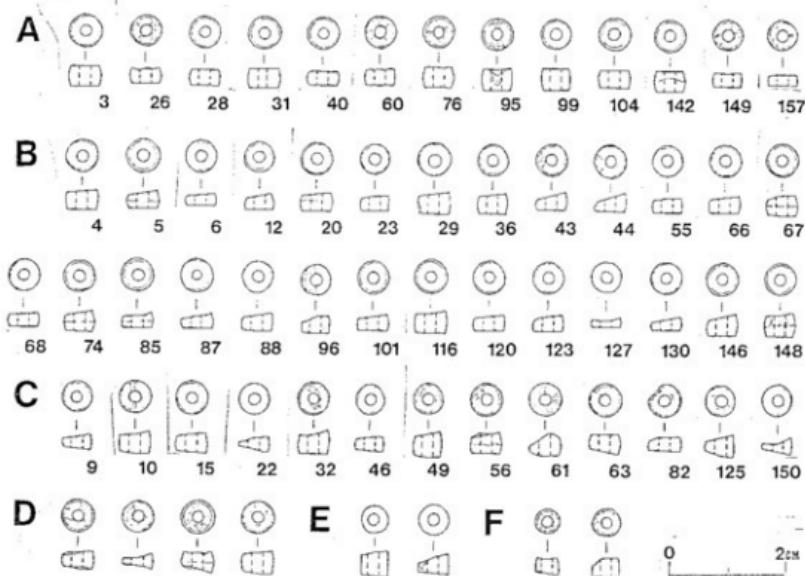
臼玉（36～44）滑石製。比較的硬質の石材を使用。形態・規模には規格性がある。算盤玉に近い直線的な胴張りで、38・40の胴部には部分的に稜が見られる。小口は片面が傾斜しており、同一個体内で厚い部分と薄い部分とがある。小口・胴部とともに研磨調整丁寧。

#### 北東隅棺外出土玉類（第18図）

すべて滑石製の臼玉である。総数159個。滑石は2種類あり、灰褐色を呈し、粒子が粗く比較的硬い石材が多く使われている。一方、淡緑灰色で粒子が細かく軟らかい石材は、全体の約2割程度である。しかし、両者の間には形態・規模等の差異は認められない。

厚さは0.07cm～0.44cmと差があるが、0.10cm以下と0.40cm以上は極めて少なく、0.30cm前後が圧倒的に多い。これに比べ径は0.46cm～0.55cmと差は小さく、0.50cm～0.55cmが殆どである。孔径は、87の0.17cmを除き他はすべて0.19cmである。重量も0.05g～0.16gであるが、0.10g前後が最も多い。このように多少の差はあるものの、全体的に見れば規模はかなり統一されている。

形態は、算盤玉形を基本とする直線的な胴張りを有する一群と、胴部が直線的な管状を呈する一群とに分けられる。胴張りを有する一群が圧倒的に多く、管状を呈する一群はわずか4個にすぎない。これらを小口の形態と調整によってさらに細分すると、胴張りを有する一群はA～D、管状を呈する一群はEとFの2種類に分けられる。



第18図 一号墳主体部（北東隅）出土白玉実測図

A (31個) 算盤玉に最も近く、均等な厚さを有する。小口は研磨調整を原則とし、一部に片面が未調整の個体も含まれる。

B (79個) 全体の半数を占める。小口の片面だけを斜めに研磨しているため、厚さが不均等である。小口はすべて研磨調整。

C (37個) 小口の両面を斜めに切断しており、厚さは不均等。小口は一部あるいは片面のみの研磨調整。

D (8個) 形態はCと同じ。小口は切断面を残し、未調整。

E (2個) 小口の両面を斜めに切断しており、厚さは不均等。小口は片面のみ研磨調整。

F (2個) 円錐台形を呈する。小口は未調整かあるいは片面のみの研磨調整。

A～Dには、わずかではあるが胴部に稜を有する個体と、反対に殆ど胴張りのない個体がある。また、紐ずれらしい痕跡が認められるものもある。

公事塚 1号墳出土玉類一覧表

主体部南側出土玉類

No	種類	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				長さ(厚)	径	孔径		
1	勾玉	瑪瑙	淡橙	(長) 2.79 (厚) 0.87	(幅) 1.80	0.15 0.23	5.60	片面穿孔。穿孔部にわずかな亀裂あり。
2	管玉	綠色 凝灰岩	淡灰青		1.78	0.40 0.22	0.30	片面穿孔。一部に擦痕あり。
3	"	"	"	2.84	0.41	0.20	0.50	両面穿孔。表面風化。
4	墾玉	琥珀	暗茶褐		1.40	0.97~1.04	0.32	0.88 両面穿孔。良質材。
5	"	"	茶褐					両面穿孔。不良材。
6	"	"	"	1.46	1.24~	0.32	0.85	½欠損。両面穿孔。不良材。
7	"	"	"	1.22	0.88~0.98	0.32	0.50	¼欠損。両面穿孔。不良材。
8	"	"	"	1.19	0.83~1.02	0.20	0.40	½欠損。両面穿孔。不良材。
9	"	"	"	1.50			1.10	破片。両面穿孔。不良材。
10	"	"	"		1.23以上	0.38	1.05	破片。両面穿孔。不良材。
11	丸玉	ガラス	濃紺	0.72	0.76	0.18	0.53	小口未調整。
12	"	"	"	0.65	0.78	0.21	0.36	一部欠損。風化著しい。
13	小玉	"	"	0.66	0.71~0.83	0.20	0.50	小口わずかに抑え調整。
14	"	"	"	0.39~0.42	0.63	0.18	0.20	小口抑え調整。気泡多い。
15	"	"	紺	0.35	0.45	0.18	0.10	管状を呈する。小口抑え調整

No.	種類	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				長さ(厚)	径	孔径		
16	小玉	ガラス	濃紺	0.38～0.44	0.62	0.20	0.25	小口押え調整。
17	"	"	"	0.40～0.46	0.52～0.62	0.20	0.20	菱形に近い。小口押え調整。
18	"	"	紺	0.40～0.45	0.53～0.61	0.21	0.20	椭円形。小口押え調整。
19	"	"	"	0.24～0.27	0.53	0.21	0.10	小口押え調整。
20	"	"	"	0.40～0.49	0.58～0.62	0.22	0.22	隅丸方形。小口押え調整。
21	"	"	濃紺	0.61	0.67		0.17	½欠損。小口押え調整。
22	"	"	"	0.58	0.43	0.13	0.15	管状を呈する。小口押え調整。
23	"	"	紺	0.37	0.39～0.48	0.15	0.08	小口押え調整。
24	"	"	濃青緑	0.34	0.52	0.14	0.10	小口未調整。
25	"	"	淡青緑	0.17	0.31	0.10	0.02	小口未調整。
26	"	"	"	0.25	0.34～0.41	0.11	0.04	椭円形。小口未調整。
27	"	"	"	0.20	0.43	0.14	0.04	小口押え調整。
28	"	"	"	0.14	0.28	0.11	0.01	小口押え調整。
29	"	"	"	0.22	0.31	0.09	0.03	小口押え調整。
30	"	"	淡紺	0.16	0.35	0.13	0.03	小口押え調整。
31	"	"	青緑	0.25	0.30	0.08	0.03	小口未調整。風化著しい。

No	種類	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				長さ(厚)	径	孔径		
32	小玉	ガラス	淡青緑	0.14~0.17	0.30	0.09	0.02	小口押え調整。
33	"	"	"	0.19	0.29	0.07	0.02	小口未調整。
34	"	"	"	0.13~0.16	0.30	0.12	0.02	胴張隅丸方形。小口押え調整
35	"	"	"	0.18	0.25	0.09	0.01	胴張隅丸方形。小口押え調整
36	臼玉	滑石	暗灰	0.16~0.21	0.39~0.41	0.18	0.04	-
37	"	"	"	0.21~0.26	0.37~0.39	0.20	0.05	-
38	"	"	"	0.20~0.26	0.39~0.41	0.18	0.05	部分的に穢あり。
39	"	"	"	0.18~0.22	0.39~0.41	0.19	0.05	-
40	"	"	"	0.28~0.29	0.37~0.40	0.18	0.06	部分的に穢あり。
41	"	"	"	0.17~0.24	0.38~0.41	0.18	0.04	-
42	"	"	"	0.23~0.26	0.37~0.40	0.18	0.06	-
43	"	"	"	0.24~0.25	0.38~0.42	0.19	0.06	-
44	"	"	"	0.22~0.24	0.38~0.42	0.18	0.05	-

公事塚1号墳出土玉類一覧表

主体部北側出土滑石製臼玉

No	形	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				長さ(厚)	径	深		
1	D	粒子粗	灰褐	0.21~0.30	0.50~0.53	0.19	0.10	
2	D	"	"	0.21~0.30	0.51~0.53	0.19	0.10	
3	A	"	"	0.33	0.51~0.55	0.19	0.14	
4	B	"	"	0.28~0.33	0.50~0.54	0.19	0.13	
5	B	"	"	0.21~0.28	0.48~0.54	0.19	0.09	部分的に稜あり。
6	B	"	"	0.15~0.19	0.50~0.51	0.19	0.07	胴張り殆どなし。
7	D	"	"	0.23~0.34	0.48~0.52	0.19	0.10	
8	E	"	"	0.32~0.44	0.47	0.19	0.12	
9	C	"	"	0.15~0.26	0.46~0.50	0.19	0.07	
10	C	粒子緻密	淡緑灰	0.29~0.37	0.49~0.52	0.19	0.15	
11	B	粒子粗	灰褐	0.17~0.22	0.53~0.54	0.19	0.08	
12	B	粒子緻密	淡緑灰	0.17~0.23	0.48~0.50	0.19	0.08	
13	D	粒子粗	灰褐	0.08~0.26	0.49~0.51	0.19	0.07	縫ずれ?
14	C	"	"	0.27~0.37	0.47~0.50	0.19	0.12	
15	C	"	"	0.22~0.32	0.51~0.55	0.19	0.11	
16	B	"	"	0.22~0.33	0.52~0.54	0.19	0.10	

No	形	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				長さ(厚)	径	径		
17	D	粒子粗	灰褐	0.17~0.30	0.50~0.53	0.19	0.10	
18	A	"	"	0.30	0.49~0.52	0.19	0.13	
19	B	"	"	0.29~0.34	0.50~0.55	0.19	0.14	組ずれ?
20	B	粒子緻密	淡緑灰	0.23~0.30	0.50~0.54	0.19	0.11	部分的に稜あり。
21	A	"	"	0.27	0.49~0.51	0.19	0.12	
22	C	粒子粗	灰褐	0.07~0.24	0.50~0.51	0.19	0.06	
23	B	粒子緻密	淡緑灰	0.19~0.25	0.47~0.49	0.19	0.09	
24	C	粒子粗	灰褐	0.11~0.22	0.50~0.53	0.19	0.07	組ずれ?
25	B	"	"	0.15~0.23	0.15~0.54	0.19	0.09	
26	A	"	"	0.26	0.50~0.51	0.19	0.10	小口片面未調整。
27	A	"	"	0.37	0.50~0.53	0.19	0.15	
28	A	粒子緻密	淡緑灰	0.24	0.48~0.52	0.19	0.09	
29	B	粒子粗	灰褐	0.30~0.36	0.50~0.53	0.19	0.14	
30	B	"	"	0.25~0.32	0.51~0.55	0.19	0.13	組ずれ?
31	A	"	"	0.31	0.51~0.54	0.19	0.14	組ずれ?
32	C	"	"	0.29~0.39	0.52~0.55	0.19	0.15	組ずれ?

No	形	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				長さ(厚)	径	径		
33	C	粒子粗	灰褐	0.10~0.27	0.50~0.52	0.19	0.07	脇張り殆どなし。
34	C	"	"	0.26~0.34	0.51~0.55	0.19	0.13	
35	A	"	"	0.36	0.47~0.52	0.19	0.16	絹ずれ?
36	B	粒子緻密	淡緑灰	0.28~0.32	0.48~0.51	0.19	0.14	絹ずれ?
37	B	粒子粗	灰褐	0.18~0.22	0.52~0.53	0.19	0.09	脇張り殆どなし。
38	C	粒子緻密	淡緑灰	0.13~0.31	0.51~0.53	0.19	0.09	
39	F	粒子粗	灰褐	0.21~0.28	0.37~0.40	0.19	0.05	
40	A	"	"	0.22	0.50~0.53	0.19	0.09	
41	B	"	"	0.15~0.26	0.52~0.55	0.19	0.09	
42	B	"	"	0.25~0.36	0.49~0.53	0.19	0.13	
43	B	"	"	0.14~0.29	0.50~0.53	0.19	0.10	
44	B	"	"	0.11~0.30	0.52~0.54	0.19	0.09	
45	B	"	"	0.18~0.33	0.49~0.51	0.19	0.10	
46	C	"	"	0.18~0.23	0.48~0.50	0.19	0.09	
47	C	"	"	0.14~0.35	0.49~0.53	0.19	0.09	
48	B	"	"	0.26~0.38	0.49~0.52	0.19	0.13	

No.	形	材質	色調	規 模 (cm)			重量	備 考
				長さ(厚)	径	径		
49	C	粒子粗	灰褐	0.29~0.41	0.46~0.50	0.19	0.15	
50	B	"	"	0.25~0.35	0.50~0.53	0.19	0.14	
51	A	粒子緻密	淡緑灰	0.30	0.48~0.52	0.19	0.13	
52	A	粒子粗	灰褐	0.37	0.49~0.52	0.19	0.15	縋ずれ?
53	A	"	"	0.30	0.51~0.54	0.19	0.14	
54	B	"	"	0.22~0.29	0.51~0.54	0.19	0.13	
55	B	"	灰茶褐	0.21~0.25	0.48~0.50	0.19	0.10	脣張り殆どなし。
56	C	粒子緻密	淡緑灰	0.28~0.34	0.51~0.54	0.19	0.13	部分的に稜あり。
57	C	粒子粗	灰褐	0.16~0.29	0.47~0.53	0.19	0.10	
58	B	"	"	0.23~0.31	0.48~0.51	0.19	0.13	
59	E	"	"	0.13~0.34	0.49~0.51	0.19	0.12	
60	A	"	"	0.28	0.50~0.52	0.19	0.12	小口片面未調整。
61	C	"	"	0.10~0.34	0.52~0.54	0.19	0.10	
62	C	"	"	0.30~0.35	0.48~0.52	0.19	0.14	
63	C	粒子緻密	淡緑灰	0.22~0.33	0.49~0.52	0.19	0.11	
64	C	"	"	0.32~0.30	0.45~0.50	0.19	0.11	

No	形	材質	色調	規 模 (cm)			重量	備 考
				長さ(厚)	径	径		
65	B	粒子 粗	灰 褐	0.24~0.29	0.50~0.52	0.19	0.13	
66	B	粒子緻密	淡緑灰	0.21~0.28	0.50~0.53	0.19	0.11	
67	B	粒子 粗	灰 褐	0.22~0.34	0.50~0.54	0.19	0.13	部分的に稜あり。
68	B	粒子緻密	淡緑灰	0.19~0.24	0.47~0.52	0.19	0.09	
69	A	粒子 粗	灰 褐	0.30	0.47~0.52	0.19	0.14	
70	C	"	"	0.36~0.41	0.50~0.53	0.19	0.16	
71	B	"	"	0.23~0.28	0.51~0.53	0.19	0.11	
72	A	"	"	0.35	0.50~0.54	0.19	0.17	
73	B	"	"	0.18~0.24	0.51~0.54	0.19	0.09	
74	B	"	"	0.28~0.35	0.47~0.52	0.19	0.13	部分的に稜あり。
75	C	"	"	0.21~0.33	0.47~0.51	0.19	0.11	
76	A	"	"	0.33	0.50~0.53	0.19	0.14	小口片面未調整。
77	B	"	"	0.24~0.33	0.51~0.54	0.19	0.13	
78	B	"	"	0.29~0.36	0.49~0.53	0.19	0.15	
79	B	"	"	0.20~0.23	0.51~0.53	0.19	0.09	
80	D	"	"	0.25~0.35	0.51~0.54	0.19	0.12	部分的に稜あり。

No	形	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				厚さ(厚)	径	径		
81	C	粒子 粗	灰 褐	0.20~0.27	0.49~0.51	0.19	0.11	縋ずれ?
82	C	" "		0.41~0.24	0.51~0.54	0.19	0.09	
83	A	" "		0.31	0.47~0.51	0.19	0.13	
84	D	" "		0.24~0.39	0.50~0.53	0.19	0.13	
85	B	" "		0.19~0.27	0.50~0.53	0.19	0.09	部分的に稜あり。
86	C	" "		0.24~0.31	0.50~0.54	0.19	0.13	縋ずれ?
87	B	" "		0.15~0.24	0.51~0.54	0.17	0.08	
88	B	粒子緻密	淡緑灰	0.21~0.30	0.50~0.51	0.19	0.12	胴張り殆どなし。
89	D	粒子 粗	灰 褐	0.18~0.29	0.48~0.52	0.19	0.10	
90	A	" "		0.33	0.47~0.51	0.19	0.14	
91	A	" "		0.33	0.50~0.52	0.19	0.14	
92	C	" "		0.17~0.23	0.48~0.51	0.19	0.09	
93	B	" "		0.16~0.26	0.48~0.53	0.19	0.09	部分的に稜あり。
94	B	" "		0.24~0.34	0.48~0.53	0.19	0.13	
95	A	粒子緻密	淡緑灰	0.37	0.47~0.51	0.19	0.13	縋ずれ?
96	B	" "		0.19~0.29	0.48~0.49	0.19	0.10	胴張り殆どなし。

No	形	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				厚さ	径	径		
97	A	粒子粗	灰褐	0.32	0.50~0.55	0.19	0.14	
98	A	"	"	0.31	0.48~0.52	0.19	0.14	
99	A	"	"	0.37	0.45~0.49	0.19	0.15	
100	B	"	"	0.18~0.29	0.51~0.54	0.19	0.10	
101	C	"	"	0.19~0.28	0.52~0.54	0.19	0.11	
102	C	"	"	0.21~0.30	0.51~0.54	0.19	0.12	
103	A	粒子緻密	淡綠灰	0.30	0.49~0.52	0.19	0.14	
104		"	"	0.29	0.51~0.54	0.19	0.07	小口片面木調整。
105	B	粒子粗	灰褐	0.25~0.36	0.49~0.53	0.19	0.13	
106	B	"	"	0.28~0.36	0.48~0.55	0.19	0.13	
107	C	"	"	0.13~0.33	0.48~0.52	0.19	0.09	
108	B	"	"	0.22~0.27	0.49~0.52	0.19	0.10	
109	C	"	"	0.17~0.27	0.48~0.51	0.19	0.10	
110	B	"	"	0.26~0.32	0.49~0.55	0.19	0.12	
111	B	"	"	0.15~0.20	0.49~0.51	0.19	0.07	細ずれ?
112	C	"	"	0.18~0.28	0.49~0.52	0.19	0.10	細ずれ?

No	形	材質	色調	規 模 (cm)			重量	備 考
				厚さ	径	径		
113	B	粒子粗	灰褐	0.21~0.30	0.49~0.53	0.19	0.12	
114	A	粒子緻密	淡緑灰	0.27	0.46~0.50	0.19	0.11	
115	C	粒子粗	灰褐	0.14~0.27	0.50~0.52	0.19	0.09	
116	B	"	"	0.32~0.38	0.49~0.55	0.19	0.16	
117	C	"	"	0.16~0.23	0.51~0.53	0.19	0.08	
118	B	"	"	0.25~0.33	0.48~0.51	0.19	0.12	
119	C	"	"	0.10~0.20	0.50~0.52	0.19	0.09	胴張り殆どなし。
120	B	"	"	0.20~0.25	0.52~0.54	0.19	0.10	
121	B	"	"	0.26~0.32	0.50~0.53	0.19	0.13	
122	C	"	"	0.17~0.31	0.48~0.50	0.19	0.10	
123	B	粒子緻密	淡緑灰	0.17~0.27	0.50~0.51	0.19	0.12	胴張り殆どなし。
124	B	粒子粗	灰褐	0.29~0.32	0.50~0.54	0.19	0.13	
125	C	"	"	0.15~0.38	0.47~0.50	0.19	0.12	
126	B	"	"	0.16~0.19	0.47~0.49	0.19	0.07	
127	B	粒子緻密	淡緑灰	0.13~0.16	0.49~0.50	0.19	0.06	胴張り殆どなし。
128		粒子粗	灰褐	0.24~0.33	0.51~0.53	0.19	0.13	

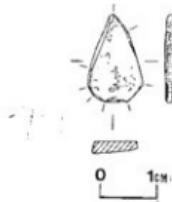
No.	形	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				厚さ	径	径		
129	B	粒子 粗	灰 褐	0.22~0.34	0.46~0.51	0.19	0.11	
130	B	"	"	0.09~0.21	0.50~0.53	0.19	0.08	
131	A	"	"	0.31	0.51~0.54	0.19	0.13	
132	A	"	"	0.32	0.49~0.5	0.19	0.14	
133	B	"	"	0.17~0.23	0.54~0.55	0.19	0.09	網張り始どなし。
134	B	"	"	0.17~0.21	0.49~0.52	0.19	0.09	部分的に稜あり。
135	B	"	"	0.25~0.34	0.48~0.52	0.19	0.13	
136	F	"	"	0.18~0.31	0.42~0.46	0.19	0.10	
137	B	"	"	0.23~0.32	0.49~0.51	0.91	0.13	
138	B	"	"	0.15~0.19	0.50~0.52	0.19	0.08	
139	B	"	"	0.16~0.29	0.49~0.51	0.19	0.09	
140	B	"	"	0.24~0.32	0.50~0.55	0.19	0.13	
141	B	"	"	0.29~0.32	0.50~0.52	0.19	0.14	
142	A	粒子緻密	淡緑灰	0.33	0.50~0.53	.19	0.16	部分的に稜あり。
143	B	粒子 粗	灰 褐	0.19~0.24	0.50~0.53	0.19	0.09	
144	B	"	"	0.20~0.29	0.48~0.53	0.19	0.10	

No	形	材質	色調	規 模(cm)			重量	備 考
				厚さ	径	径		
145	B	粒子粗	灰褐	0.19~0.26	0.48~0.50	0.19	0.10	
146	B	"	"	0.28~0.37	0.50~0.53	0.19	0.13	
147	B	粒子緻密	淡緑灰	0.26~0.30	0.47~0.51	0.19	0.12	
148	B	粒子粗	灰褐	0.37~0.40	0.47~0.53	0.19	0.16	部分的に稜あり。
149	A	"	"	0.22	0.48~0.50	0.19	0.08	小口片面未調整。
150	C	"	"	0.09~0.27	0.51~0.52	0.19	0.07	脇張り殆どなし。
151	C	"	"	0.11~0.27	0.52~0.55	0.99	0.07	
152	B	"	"	0.14~0.2	0.49~0.52	0.19	0.07	
153	B	粒子緻密	淡緑灰	0.25~0.29	0.50~0.53	0.19	0.13	
154	B	粒子粗	灰褐	0.25~0.28	0.49~0.51	0.19	0.13	
155	B	"	"	0.26~0.35	0.50~0.55	0.19	0.14	
156	C	"	"	0.25~0.40	0.50~0.53	0.19	0.13	
157	A	"	"	0.18	0.49~0.51	0.19	0.07	
158	B	"	"	0.30~0.00	0.51~0.53	0.19	0.07	一部欠損。
159	B	粒子緻密	淡緑灰	-----	-----	0.19	0.02	残欠

\*は一部欠損のため参考数値

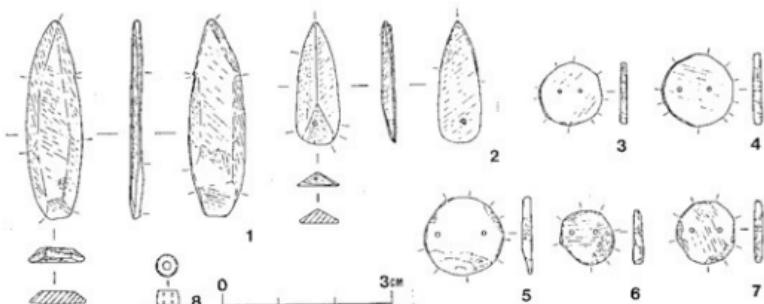
南側トレンチ出土滑石製剣形品（第19図）

灰白色を呈する軟質の石材使用。長さ3.12cm、幅1.92cm、厚さ0.21cm～0.44cm、重量3.5g、孔径0.15cmを測る。鍔はない、扁平な板状を呈する。側面は研磨による研ぎ出し。表面は稚な研磨調整で、裏面は自然の剥離面をそのまま残している。



第19図

一号墳墳丘南側出土剣形品実測図



第20図 一号墳墳丘下竖穴出土石製模造品実測図

剣形品2・有孔円板5・臼玉1が出土している。出土地点は1の剣形品が西側壁付近であるのに対し、他は北側に偏っている。

剣形品（第20図）1は透明感のある緑灰色と、乳白色が混じった硬質の石材を使用している。柳葉形を呈し、横断面は扁平な台形で鍔はない。刃部については、表面が顕著に研ぎ出しているのに対し、裏面は痕跡程度のわずかな研ぎ出してある。片方の刃部の側面は、刀子による削りによって形を整えている。他方の刃部側面および表裏の平坦面はすべて研磨による調整である。把尻付近の表裏はともに斜めに研ぎ出されており、端部側面は未調整である。孔は穿たれていない。2は黒灰褐色で硬質の石材を使用している。横断面は三角形を呈し、表面にのみ明瞭な鍔を有する。裏面はほぼ平坦で、刃部側面は切先に向かって厚みを増す。把尻付近の表面は斜めに研ぎ出

されており、1孔を穿つ。調整はすべて研磨による。

双孔円板（3～7）石材は4種類あるが、5を除いて硬質である。5～7は剥落等の欠損部を持つ材料を使っている。そのため6・7は不整形で、側面に未調整部分が認められる。表裏はともに丁寧な研磨調整。側面は研磨による研ぎ出し。

臼玉(8)小形品。胸部中央から二つに剥離。わずかに胴張りを有する。小口は研磨調整。

墳丘下竖穴遺構出土滑石製模造品

No.	種類	材質	色調	規 模 (cm)				重量	備 考
				長(径)	幅(径)	厚さ	孔 径		
1	剣形品	滑 石	淡 灰	6.97	2.04	0.46	×	9.30	削りと研磨調整。 緑色を含む硬質材。
2	"	"	黑灰褐	4.29	1.50	0.49	0.17	3.85	研ぎ出しと研磨調整。 硬質材。
3	有孔円板	"	灰 褐	2.30	2.18	0.19～0.26	0.17	2.40	研ぎ出しと研磨調整。 硬質材。
4	"	"	黑灰褐	2.56	2.49	0.24～0.31	0.17	3.95	研ぎ出しと研磨調整。 硬質材。
5	"	"	灰 白	2.85	2.75	0.30～0.34	0.17	5.00	研ぎ出しと研磨調整。 軟質材。
6	"	"	暗灰褐	2.05	1.73	0.24～0.36	0.14～0.15	2.00	不整形。 研ぎ出しと研磨調整。 硬質材。
7	"	"	"	2.23	2.11	0.27～0.31	0.15	2.55	不整形。 研ぎ出しと研磨調整。 硬質材。
8	臼 玉	"	灰 褐	—	0.39	0.26	0.14	0.04	わずかに胴張り。

## 小 結

### (1) 主体部南側出土玉類について

出土状況を見ると、一連の装身具として副葬されたものではなく、撒かれたものではないかと思われる。さらに詳細に見ると、種類ごとにまとまりを示していることがわかる。したがって、種類ごと撒いたのではないかと考えられる。これらのなかで、菅玉・畫玉・ガラス玉が混在しているのに対し、勾玉と臼玉はわずかに離れて検出されている。このことから、臼玉を他の玉類と区別して捉えなければならない可能性もある。しかし、北側から出土している同種の臼玉と比較してみると明らかに滑石の材質、規模等に違いを見せることから、南側出土の臼玉は他の玉類と同様装身具として使われていた可能性が高い。

次に、各玉類の製作方法について見ると、まず勾玉・菅玉・畫玉の穿孔方法が注目される。菅玉には両面穿孔と片面穿孔があるが、これは菅玉の長さの差による穿孔距離と関連があるものと思われる。しかし、一方では硬い瑪瑙の勾玉が片面穿孔であるのに対し、軟らかい琥珀製の畫玉が両面穿孔となっている。この現象は、両面穿孔から片面穿孔へと穿孔方法が変化する過渡的な時期に製作されたことを示す資料かもしれない。

ガラス玉の製作方法は大きく3種類に分けられる。ひとつは最も大きい丸玉で、一個ずつ製作をおこなう。芯を抜いた後にできる小口の突出と凹みはそのまま残る。これに対し個体数の最も多い紺色系の小玉は、管状のガラスを切った小口を調整して仕上げている。その小口の調整方法は、小口の片面だけが斜めになっていることや、最も薄い部分の胴部が外側に膨らんでいること、そして孔が中膨らみになる胴体があることから、先端に平坦面をもつピンセット状の工具で挟み込むことによって調整しているものと思われる。もうひとつの製作方法は、小形の青緑系に見られる。これは、細いガラス紐を芯に巻きつけただけのもので、小口への調整等はおこなわない。したがって、環状にしたガラス紐の両端を接合した痕跡がそのまま残っている個体も見られる。

### (2) 主体部北側出土の滑石製臼玉について

最大径が0.50cm～0.55cmとばらつきが小さく、孔径が1例を除きすべて0.19cmに統一されている。また、孔は小口面の傾斜角度とは関係なく、側面と並行に穿孔されている。以上のことから、これらの臼玉は菅玉状に加工した滑石をさらに輪切りにすることによって製作されたものと思われる。怪のばらつきについては、その後の胴張りを作り出すための研磨調整の度合いによるものであろう。菅玉からの切断方法については、次の形態分類からうかがうことができる。胴部の形態で見ると算盤玉形を基本とする3種類と、管状を呈する2種類の計5種類がある。これらを小口の形態で見ると、小口の両面がともに孔に対して直角で均等な厚さを有するもの、小口の片面のみが斜めになっており厚さが不均等なもの、そして小口の両面がともに斜めになっており厚さの不均等が著しいものの3種類に分けられる。小口の研磨調整を丁寧におこなっているものは少いことから、これら小口の形態は菅玉を切断した時の形態をほぼそのまま残しているものと思わ

れる。とすれば切断方法にも3種類あり、管玉に対して直角に切断するもの、片側だけを斜めに切断するもの、そして「ハ」の字形に連続して斜めに切断してゆくものとがある。個対数から見れば、片側だけを斜めに切断するものが約半数を占め、直角に切断してゆく最も算盤玉に近い形態のものは2割程度しかない。

次に、個体数は少ないが、胴部に稜を残す例がある。これについては、意図的に稜を作り出しているのではなく、胴部を膨らませるための研磨調整の過程でできたものと思われる。したがって、算盤玉形を呈し明確な稜を有する初期の臼玉に比べて、若干の形骸化が認められよう。

以上のように、小形で規模の差が少なく、算盤玉形を基本とする形態が最も多い本古墳出土の臼玉は、古式の様相を呈している。しかし、形態に多様化が見られることや、初期の退化傾向が認められることなどから、初期の臼玉に比べて後出の要素を持つ。

### (3) 墳丘下竪穴状遺構出土滑石製模造品について

剣形品は2個体出土しているが、形態・滑石の材質とともに異なっている。鎌を表現している剣形品は、黒灰褐色を呈する硬質の滑石を使っている。鎌はシャープに研ぎ出されており、研磨調整も丁寧である。均整のとれた形態や、精巧な作りから、形式化した剣形品のなかでは古式に属するものと思われる。一方、鎌を表現しない柳葉形の剣形品は、緑色と乳白色を含む硬質の滑石を使用している。この石材を使った滑石製模造品は少なく、茨城県内では東茨城郡人洗町鏡塚古墳出土品<sup>1)</sup>など、初期の模造品に見られる。形態についても同様で、扁平な卵形に比べ柳葉形は比較的少ない。最も近い出土遺跡としては、稻敷郡桜川村浮島祭遺跡<sup>2)</sup>があげられる。また、時期がわかる遺跡としては群馬県藤岡市白石稻荷山古墳<sup>3)</sup>があげられる。形的には浮島祭遺跡の出土品に最も近いが、石材・孔の有無等に差異を示す。白石稻荷山古墳出土例の場合、長さに対して幅が狭く、1例を除いて他はすべて刃部を両面から研ぎ出している。把部に2孔あり、この部分を研磨して薄く仕上げている。硬質の石材は使用せず、調整等はすべて研磨による。これと比較すると、本遺構出土の剣形品はやや不整形で、長さに対して幅が広い。把部は両面から研磨され薄く仕上げられているが、孔はない。刃部については、表面からの研ぎ出しが顕著であるのに対し、裏面からの研ぎ出しあわざかである。刃部付近の研磨調整はやや粗雑である。以上のことから、本遺構出土の剣形品は白石稻荷山古墳出土例と比較して全体的に粗雑な作りが目立ち、後出の要素が多い。しかし、扁平で粗製化した板状の剣形品と比較した場合には白石稻荷山古墳出土例の方により近い様相を持つと言えよう。したがって本遺構出土の剣形品は、簡略化された扁平剣形品の初期の形態を示す白石稻荷山古墳出土例より後出ではあるものの、著しい時間差はないと考えられる。

有孔円板は、一部に軟質材や不整形のものが見られるが、全体的には調整が丁寧で正円形に近いものが多い。また、臼玉についても小形で、わずかながら耐張りを有している。このように、

各種類とも精巧品のなかに粗製化が認められる。

したがって、本遺構出土の滑石製模造品は古式の様相を残しながら、一部で簡略化・粗製化が始まった時期に製作されたものではないかと考えられる。

(福村)

#### 註

- (1) 大場磐雄・佐野大和「常陸鏡塚」『国学院大学考古学研究報告』第1冊 1956
- (2) 大場磐雄編『神道考古学講座 第2巻 原始神道期 1』雄山閣 1972
- (3) 後藤守一・相川龍雄「多野郡平井村白石稻荷山古墳」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯 1936

### 第三節 鉄器

#### (1) 武器

##### 一号墳主体部北側出土

鉄劍（第21図1）

墳頂部A2グリットの南寄りの黄褐色砂層内から鉄劍數本と共に検出された。東北方向に切先きを置き完全な劍であるが、鍔がかなり進行し数ヶ所で折れていた。

現存長84cm、幅は中央部で3.5cm、厚さ0.9cmの両闊造りで、一般的に両斜角闊と呼ばれるものがある。茎幅は2.4～1.8cmで、厚さは0.8cm程である。目釘孔は2個あり、茎尻から4cmと11cmに位置し、口径0.7cmと0.6cmの孔が確認された。

劍身全体は直行せず、第21図1の様にゆるく蛇行している。一種の蛇行劍として報告しておきたい。

##### 一号墳主体部出土

直刀（第21図2）

主体部の東南壁寄りに刀を外側に向けて埋置されていた。現存長86.5cm、幅（刀身中央部）2.8cm、厚さ0.8cmを測り、片撫て闊式である。茎の幅2.2cm、厚さ0.8cm、刀身部峯との差は認められない。茎尻は直角で、目釘孔は茎尻から1cmと7cmの位置に認められ、その口径は0.5cmと0.7cmである。刀身部や茎には木質等は附着していない。全体的に刀身は内反りである。

鉄劍（第21図3）

主体部南東側の東寄り壁寄りに劍身を水平にして埋置されていた。現存長68cm、幅（中央部）3.1cm、厚さ0.6cmで、3つに折れて出土した。

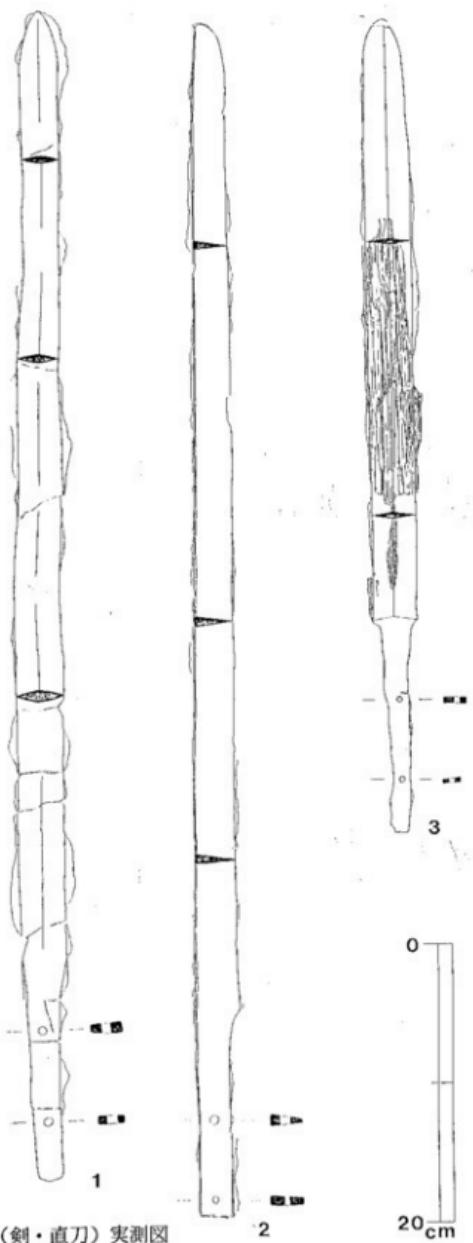
劍身の断面は菱形を呈し、鍔を持つ。闊は①同様両斜角闊で、茎は幅2.1～1cm、厚さ0.5cmである。目釘孔は茎尻から4cmと9.5cmの位置にあり、口径はいずれも0.5cmである。劍身の一部に鞘材と思われる木質が遺存しており、その中央部分に明らかに網と思われる細い繊維の布が

附着している。なを第22図19, 20の鉄（釘状金具）はこの切先附近から検出された。

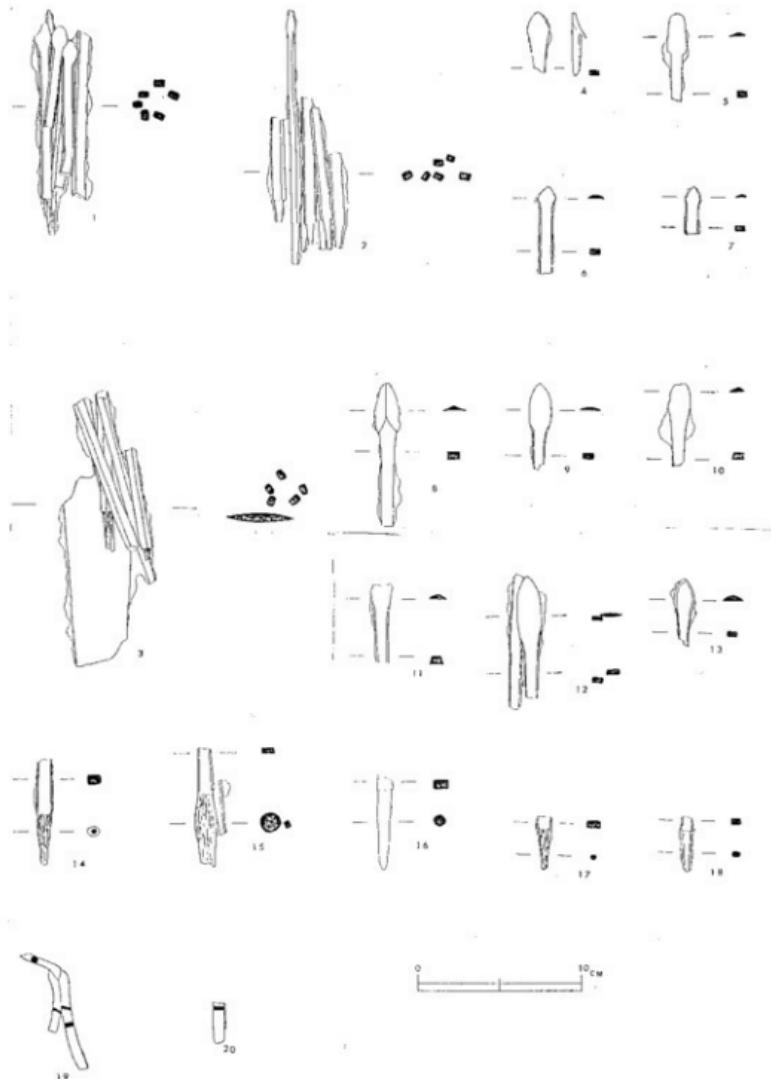
#### 鉄鎌（一括）（第22図①～⑧）

鉄鎌は2ヶ所から検出された。1カ所は主体部内の直刀先端部と、1ヶ所は主体部北側の劍と共に埋置されたものである。第22図①③は北側で、第22図②が主体部内である。主体部からは6本で、北側は10本である。

鎌身部の形状には小さな変化はあるものの、全て長頸鎌であり、ほぼ同一形式といって良い。発見された時点では16本であったが、作業中に分離し、接合することは出来なかった。第22図①～⑧の鎌身数と分離した先端部数が一致していることで理解される。復原での全長15cm程度で、鎌被部の幅と厚さはそれぞれ0.7cm, 0.4cmのものが多い。また鎌身部断面形は片丸造りあるいは両丸造りである。（小沢）



第21図  
一号墳出土鉄器（剣・直刀）実測図



第22図 一号墳出土鉄器（鉄鏃等）実測図

## ま　　と　　め

公事塚古墳群中、今回調査された2基の内、武器が副葬されていたのは1号墳のみであった。前述したように鉄劍2、直刀1、鐵鎌十数本が出土しているが、このうち№1の鉄劍と鉄鎌の半数は棺外出土であった。これらの武器の中で、特に形態的に変化する要素が多い鉄鎌と直刀について若干触れてみたい。

まず、主体部から出土した直刀について見てみよう。これは棺内の南東側に置かれていたものだが、形態上2つほどの特徴が認められる。第一に茎の幅が太く、刀身部とほとんど差がないことである。これは逆に言えば闇があまり目だたないことで、実際調査時に闇の形状を確認できず、鏽落し、X線をかけて初めて片撫で闇であることがわかったくらいである。第二の特徴は、茎尻の形状が直線的に仕上げられており、所謂直尻と呼ばれる形態を有することである。この2点は№2の年代を比定する上での傍証となろう。このように無闇あるいは茎幅の広い直刀は、比較的古いものが多く、直尻についても同様に古墳時代前期から存続する。本古墳と同じく霞ヶ浦沿岸に位置する玉造町三味塚古墳は6世紀初頭に築造された前方後円墳で、石棺内から3口の直刀が出土したが、どれも茎の幅は本古墳の例より細く、内1口は両闇を持つなど若干新しい様相を見せる。一方、県内でも古式の前方後円墳である大洗町鏡塚古墳の主体部から出土した1口の直刀は、茎が欠失し闇の形状が鏽で明確さを欠くものの、茎は刀身部と比較してもさほど細くはないなど、刀身が微妙に内返りになる点も含めて、№2と類似した特徴を有する。直刀を集成し編年作業を行った臼杵歟氏によると、本例と同様の闇部及び茎尻を持つ直刀は、4~5世紀代の古墳から出土する場合が多いという。本例の年代を考える際に参考にすべき意見であろう。

次に十数本出土した鉄鎌であるが、これらは巨視的に見るとほぼ同一形式と言っていい。完形品はないが、現存する鉄鎌は全て長頸鎌であり、無頸鎌あるいは短頸鎌は一つも含まれず、また茎闇も直闇であり、棘状突起(棘闇)を持つものもない。鎌身部の形状を見てみると、1の鉄鎌に代表されるような鎌身部の闇がはっきりしない、鎧被部の境が不明瞭で橢円形を呈するものが主流を占める。後藤守一により闇無鑿箭式と分類された一群にあたり、公事塚1号墳の場合、鎌身部が大型のものと、それよりもやや小形のものの2種類が認められるが、前者は一例のみであった。その他、数は少ないが6・7の鎌のように先端を削して三角形に整えたもの、鎌身部に明瞭な闇を持つもの(8)、同じく鎌身部が長三角形に近い形状を持つもの(8)などが見られる。

一番多く出土した鉄鎌を取り合はず闇無鑿箭式とするが、本古墳のように長頸化したものは、大阪府野中古墳で多量の出土を見ている。報告書の中で椿葉式と分類された一群がこれにあたる。野中古墳に副葬された長頸鎌は、その中でも古い段階に属するものと考えられおり、闇無鑿箭式

も野中古墳以外では福岡県久戸第2号墳、同第13号墳、奈良県石光山4号墳などから出土し、以後、鎌身部の小形化・闊の不明瞭化という傾向を強めながら後期に至っても使用される。近畿等の先進地域では古い段階からこの形式の系譜が続くことが窺えるものの、他方関東では管見に触れた限りでは5世紀代に入るものは見られず、類例が地域的に少ないことも事実であるが、闊無鑿箭式は棘闊あるいは台形闊のものしか現在のところ認められていないので、関東では6世紀代にならないと出現しない形式であるといえよう。

5の鉄鎌は「剣身形」とも言われる。刃部がほぼ平行し、鎌身部の闊がはっきりと認められる形式である。大阪府カトンボ山古墳から同様の鉄鎌が出土し、系譜的には不明な点があるものの、地域によっては比較的古い時期から出現したことが想像される。関東地方では、埼玉県稻荷山古墳の第1主体部から出たものが最も古い一群に属し、後期に至って鉄鎌に占める割合を増加させ、先の闊無鑿箭式や片刃箭式と共に長頸鎌の主流を占める形式である。白井久美子氏は千葉市東南部ニュータウン地区内の古墳から出土した鉄鎌の分析を通じ、この形式の鉄鎌は先行する鎌の流れから理解することが困難で、6世紀前半に類似するものが見られるが、外来的な要素が濃いと述べ、初現を明らかにできないが6世紀中葉以後急速に普及する形式としている。いずれにせよ、流行の中心は後期にある形式である。

鎌身部と共に、鉄鎌の年代的な位置付けを知る上で重要なのは鎌被の闊の部分である。今までに少し触れたように、概ね構造上台形闊・直闊・棘闊に大別できるが、長頸鎌は棘闊の出現をもって新旧の二時期に分割できる。となれば、棘闊の出現した時期が問題となる。現在のところそれを特定することは難しいが、TK43期には明らかに認められ、遅くともその頃までには現わっていたのである。一方公事塚1号墳に見られる直闊は、長頸鎌の出現した段階から見られるが、棘闊の出現と共に急速に衰退してしまう。以上のように本古墳の鉄鎌は、片刃箭式を欠くことを除けば、系統的に後期に広く流行する鉄鎌の祖形となる特徴を備える。

このように考えると、公事塚1号墳の武器は直刀に見られる古い要素と、鉄鎌に表われた比較的新しい要素の、新旧2つの側面が認められる。1号墳出土の武器は、こうした面を見てみるとその年代を5世紀後半を中心とした時期に求められるのではないだろうか。

統いて、本古墳の武器を見て少し気がついた事柄に触れてみたい。本古墳の場合前述したように主体は長頸鎌であり、これらは鎌身部が比較的小さい。所謂細根系のものが全てで、短頸鎌・無頸鎌に多い広根系は全くない。元々後期古墳などの場合で言えば、鉄鎌の組成の上で広根系が占める割合が少ないと事実である。これらは比較的大形であり、後世の「上差矢」に当たると推定され、儀仗的な性格を持つのではないかと思われる。逆に言えばこれらを全く含まない公事塚1号墳の場合、実際に使用することを念頭に置いた鉄鎌組成と言える。現実に年代的な差異があるかも知れないが、後期の大型古墳から出土した長頸鎌の一部には、非常に華奢な造りのもの

があり、実用に耐えるかどうか判断に苦しむことがある。しかし、本古墳の例は埴輪部の断面を見ても重厚な造りであり、実用に供する目的で製作されたのは明白である。本古墳の被葬者はこうした実用的な鉄鎌を保有するが、他の武器も豊富に備えていたとは言い難い。公事塚1号墳と近い時期に築かれたおかつ遺物の内容も明らかな玉造町三味塚古墳と比べると、埴輪規模の大小の差もあるが遺物の構成も大きく異なり、挂甲を備え、直刀も新式のタイプを保有するに対し、公事塚1号墳の被葬者は唯一の飛び道具で大量に消費される鎌は新しいタイプを持つものの、他の武器は旧式なものを保有し、しかも必要最小限の量であり甲冑も持たないなどかなりの相違点を認められる。これは三味塚の被葬者が、出土した金剛冠に見られるように畿内との接触に努め、新しい文化の摂取に積極的であったことが一因であろう。ところが公事塚1号墳の被葬者はそうした努力をしなかったか、あるいはできなかった状況にあったと思われ、他の地域の勢力と接触が行えたとしても大型古墳の被葬者を媒介とした間接的なものでしかなかったのではないだろうか。新しいタイプを備える鉄鎌にしても副葬された形式が限られたものであったことは、一方ではその供給や取得手段は制限されていたことが考えられ、場合によっては公事塚1号墳の被葬者はその生産を掌握せず、完全に他に依存していたこともありうる。恐らく生産は三味塚古墳を始めとする霞ヶ浦北岸に築かれた、国造級の大型古墳の管理下に置かれていたのであろう。公事塚古墳の被葬者は、埴輪規模から見ても遺物の内容の点でも、明らかにこれらの被葬者とは一ランクも二ランクも下の階層に属することは明らかである。武器の保有形態から見られるこうした軍事的な階層性は、既に後期から終末期にかけての群集墳から抽出されているが、それがこの時期に成立していたかどうかは、公事塚1号墳の例だけでは不明でありさらに資料を積み重ねる必要がある。

(小沢)

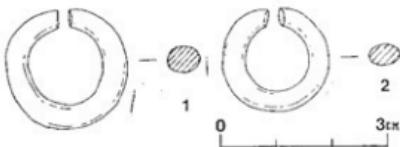
#### 参考文献

- 白井 黙 「古墳時代の鉄刀について」 日本古代文化研究1 1984  
後藤 守一, 他 「三味塚」 滋賀県教育委員会 1960  
大場 勲雄, 佐野 大和 「當陸鏡塚」 国学院大学考古学研究報告第1冊 1956  
小久保 徹, 浜野 一重, 他 「埼玉県における古墳出土遺物の研究I—鉄鎌について—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要 1984  
小森 哲也 「栃木県内古墳出土遺物考(1)—鉄鎌の変遷—」 栃木県考古学会誌第8集 1984  
関 義則 「古墳時代後期鉄鎌の分類と編年」 日本古代文化研究3 1986  
白井久美子 「東国後期古墳分析の一視点—鉄鎌から見た千葉市生実・椎名崎古墳群—」 千葉県文化財センター研究紀要10 1987  
杉山 秀宏 「古墳時代の鉄鎌について」 横原考古学研究所論集 第八 1989

(2) 金環（第23図 1・2）

鉄地金銅張。2の一部欠損。1は外径2.13cm×2.25cm、太さ0.45cm×0.61cm、重量7.85g。2は外径1.80cm×1.91cm、太さ0.37cm×0.57cm、重量4.82gを測る。1と2は規模に明確な差がある。ともに内面の金は良好に遺存。

（福村）



第23図 二号墳出土金環実測図

## 第五章 科学的調査

### 第一節 一号墳墳丘下の炭化材

試料はいずれも炭化材で、長く土中に埋没していたため脆軟になっており、顕微鏡用のプレパラートを作ることは出来なかった。したがって、ほとんどは棒状の炭化材を折ることによって現れる木口面をルーペで観察し鑑定した。

本来、木材の樹種鑑定は腐朽や風化をうけていない材の木口、板目、柾目の3断面の切片を作り、顕微鏡で詳細に観察する必要がある。しかし、今度の材は、すべて炭化しているため微細な組織構造が見えなく、更に木口のみの観察であり鑑定は困難をともなった。幸いにして、この度の試料はナラ類やカシ類が多く、鑑定結果は次表のとおりである。

公事塚 1号墳の遺構炭化材の鑑定結果一覧表 1989. 4

試料 No.	樹種名	炭化	道管の配列	放射組織	柔組織 の配列
1	カシ類 (シラカシ・ウラジロカシ) ブナ科 (アラカシなど) <i>Cyclobalanopsis</i> sp.	○	放射孔状	広放射組織	接線状
2	ナラ類 (ミズナラ・コナラ) ブナ科 <i>Quercus</i> sp.	○	環孔状	"	-
3	カシ類 (シラカシ・ウラジロカシ) ブナ科 (アラカシ) <i>Cyclobalanopsis</i> sp.	○	放射孔状	"	"
4	シダ類 (イヌシデ・アカシデ) カバノホ科 (クマシデなど) <i>Carpinus</i> sp.	○	鎖状	集合放射組織	-
5	カシ類 (シラカシ・ウラジロガシ) ブナ科 (アラカシなど) <i>Cyclobalanopsis</i> sp.	○	放射孔状	広放射組織	接線状
6	鑑定不可	○	試料が少く少ない		
7	ヌルデ・ヤマハゼなど?	○	半環孔材	多列放射組織	-
8	カシ類 (シラカシ・クラジロガシ) ブナ科 (ウラジロガシなど) <i>Cyclobalanopsis</i> sp.	○	放射孔状	広放射組織	接線状
9	ナラ類 (ミズナラ・コナラ) ブナ科 <i>Quercus</i> sp.	○	環孔状	"	"
10	カシ類 (シラカシ・ウラジロガシ) ブナ科 (アラカシなど) <i>Cyclobalanopsis</i> sp.	○	放射孔状	"	接線状
11	ナラ類 (ミズナラ・コナラ) ブナ科 <i>Quercus</i> sp.	○	環孔状	"	-
12	ナラ類 (ミズナラ・コナラ) ブナ科 <i>Quercus</i> sp.	○	"	"	-

この表から言えることは、広葉樹中でも堅くて重いカシ類やナラ材がおもに使われている。これに対してスギやマツ材などの針葉樹材が見あたらないことである。試料No.順に識別点の観察結果をのべる。

No.1 道管の配列は放射状であり、広放射組織が存在して、接線状の柔組織が密に配列しているのでカシ類と鑑定した。なおカシ類は、わが国では多数あるが関東地方ではシラカシ、ウラジロガシ、アラカシなどが多く分布している。

No.2 小径で髓心を含み、年輪幅は2~3mmである。環孔材で孔圈の道管は2~4列で、広放射組織がありナラ類と鑑定した。ただしナラ類にはミズナラとコナラがあり両者の区別は困難である。

No.3 No.1のカシ類と同様である。

No.4 道管の径はカシ類よりも小さく、その配列は全体として散在状であるが個々の道管は放射方向に鎖状につらなる。集合放射組織状のものも認められシデ類と鑑定した。ただしシデ類にはアカシデ、イヌシデ、クマシデなどがある。

No.5 No.1, 3のカシ類と同様である。

No.6 試料がごく小さく、そのうえ脆軟で木口面の観察ができなく鑑定不可能であった。

No.7 孔圈部の道管の径はやや大きく、それより晚材に向かって徐々に減少するので半環孔性といえるが、放射組織はやや広い。このような特徴だけで鑑定することは困難であるが、道管の配列からみればウルシ科のスルデやハゼノキなどが近いようにおもわれる。

No.8 No.1, 3, 5のカシ類と同様である。

No.9 No.2と同様で環孔材、孔圈の道管1~3列で、広報射組織があり、年輪幅は2~3mmである。

No.10 No.1, 3, 5, 8のカシ類と同様である。

No.11 No.2, 9のナラ類と同様である。孔圈の道管は1~3列で年輪幅は2~3mmと広い。

No.12 これもナラ類であるが比較的大径材の外側で、孔圈部の道管の配列は一列である。

(須川)

## 第二節 鉄製品の保存修復

### 1. はじめに

公事塚1号墳出土鉄製品の保存修復は、茨城県麻生町教育委員会の依頼により、東京国立文化財研究所修復技術部青木繁夫の指導のもとで犬竹が、1988年9月～1989年2月にかけて保存修復処置を実施した。

処置の対象になった鉄製品は、直刀1振、剣2振、鎌1括である。いずれの遺物も鏽が著しく、鏽瘤やその膨張による破損がみられた。また周開には砂が鎌によって付着しているので細かな形状が不明であった。

### 2. 腐食と損傷状態

これらの鉄製品の形状等の考古学的な所見については、本文中に報告がなされているので割愛し、損傷状態とX線透視写真の所見についてのみ記すことにする。

#### 1) 剣1(図版-14)

9個体に折損している。鎌や付着物などの保存状態は直刀と同じであるが、腐食のため剣身が空洞状態になっているところが数箇所ある。峰より30cm程のところに鉄鎌が鎌着している。峰より44cm程の所に鞘木と思われる若干の木片が付着しているが、脆く剥落しそうな状態である。

X線所見(図版16-1)……全体に腐食が著しく金属鉄部分は、残存していないようである。腐食によって発生したものかあるいは剣身を鍛造したために出来たものかどうか判断ができないが、鎌に並行して細かな縞が層状にはいっているのが確認される。関が明瞭につくられず、茎からゆるやかに内側して刃部にいたる。目釘孔は、茎尻から3.3cm程と9.9cmの2カ所に穿たれている。

#### 2) 直刀(図版13-1)

4個体に折損していて、刃に小さい欠損が数箇所認められる。腐食が著しく鎌瘤や鎌の膨張による剥離がみられ、また鎌によって砂が強固に付着している。刃身には鞘木と思われる木片が数箇所に残っている。茎にも柄木と思われる少量の木片が残存している。この木片の棟の部分には、柄木を緊縛したと推定される幅1mm前後の燃のない繊維状物質の痕跡が認められる。これらの残片は、いずれも大変脆く取扱うたびに崩れるような状態である。

X線所見(図版16-2)……金属部分が残されているが、全体に腐食がかなり進行していて、特に切先から刃にかけて腐食していることが分かる。目釘孔は茎尻より0.9cmと6.6cm程の2カ所にある。

### 3) 剣②(図版13-2)

鍔による砂の付着と鏽瘤が著しく、鋒をわずかに欠き、7個体に折損している。また関部分で大きく曲っている。剣身には、鞘木が残存しており、そこには織物(第24-①②)の圧痕が残っている。この圧痕の観察(東京国立博物館沢田むつ代氏教示による)から綾織りと縦糸の強い平織りの二種類の織物が使用されていたのではないかと考えられる。これら二種類の織物は、一定間隔で交互に残存していることから、鞘に綾織りの布をまきつけたうえに、一定間隔に幅3mm程度の平織りの紐をまいしたものと考えられる。これら織物は保存状態が悪く、繊維がほとんど残っていないかったため資料を採取して繊維の種類を同定することが出来なかったが、繊維圧痕の実体顕微鏡観察によれば、使用されていた繊維は非常に細く、S字状に撚っていたと考えられ、またこの繊維の細さから類推して、使用された繊維は絹であると考えられる。

X線所見(図版16-3)……腐食が著しいので目釘孔を明瞭には確認できないが、茎尻より3.5cm程のところに1個と、8.6cm程のところに1個の目釘孔があると思われる。さらに11.2cm程のところには目釘孔と考えられるものが2個存在するが断定はできない。鞘木の木目が刃に並行した状態で撮影されており、現代の鞘木のように柾目取りした木を使用していることが分かる。

### 4) 鉄鎌(図版-15)



第24図

剣附着織維拡大図(①×3, ②×9)。

腐食が著しくほとんどの鎌が空洞で、砂が鎌によって強固に付着している。剣と鎌が付着している鎌もある。

### 3. X線撮影の条件

X線撮影は、フィリップス工業用X線検査装置 MG-321型、富士工業用X線フィルムIX 100、0.3mm鉛増感紙を使用した。撮影条件は以下の通りである。

直刀……90KV 5 mA 5 min

剣①……75KV 5 mA 5 min

剣②……90KV 5 mA 5 min

### 4. 保存修復

保存修復は以下に述べるような方法で実施した。

#### 1) クリーニング

形状が明確になるように表面に付着している砂や鎌は、エアーブラッシュ装置（ガラスバウダー使用、噴射圧力 6 kg/cm<sup>2</sup>）と超音波メスを用いて除去した。鎌瘤はニッパやタガネを使用して落とした。鎌瘤を取除いた時にそのなかから水がでてきたものがいくつかあった。量が少なかったためにその化学的性質に関する調査は出来なかったが、いずれの鎌瘤の中の水も、pH試験紙による検査でpH 3程度を示した。これを滤紙に滲みこませたところ短時間で鎌色に変化した。このことから水にはかなりの鉄イオンが溶けていることが想像される。

#### 2) 脱塩処理

直刀は、蒸留水に浸漬してその水を1日2回交換して処理を行なったが、その間鎌の鎌を防止するため、処理槽内に窒素ガスを注入して、無酸素の状態で処理を行なった。剣や鎌については、ソクスレー抽出法で脱塩処理を実施した。

いずれも脱塩素量は、硝酸銀法でチェックした。

#### 3) 強化処理

脆弱になった遺物を強化するために、アクリル樹脂エマルション（プライマルMV-1）を減圧含浸した。繊維などの有機物が減圧含浸中にくずれる可能性があった剣②については、アクリル樹脂（バラロイドB-72）の20%トルエン溶液を減圧含浸した。

#### 4) 復元処置

破片重量が軽く接合面がぴったりと一致する箇所は、α-シアノアクリレート樹脂（アロンアルファー）で接着した。接合部に隙間などがある場合には、エポキシ樹脂（セメダインハイスター）にフェノール樹脂マイクロバルーンを混合したペースト状樹脂で接着した。

矢頭部については、エポキシ樹脂にフェノール樹脂マイクロバルーンを混合したペースト状樹脂か、あるいは繊維素接着剤（セメダインC）にフェノール樹脂マイクロバルーンを混

合した樹脂で補修した。

補修部分の補彩は、アクリル絵の具（リキテックス）を使用して行なった。

#### 5) 保存ケースの製作

可能な限り腐食の原因物質を取除き、錆が変化しないように樹脂を使用したが、このような保存修復処置をしても、湿度が高く鉄製品に水が結露するような環境に保存すればふたたび腐食が始まる可能性がある。多少の温度変化があっても水が結露する恐れのない相対湿度40%以下の環境の中で保存管理するようにアクリル樹脂板を加工してケースを作成した。このケース内を乾燥した酸素の出来るだけ少ない環境を保持するためにシリカゲルと脱酸素剤を封入した。

#### 5. おわりに

以上述べたような方法で保存修復処理を行なったが、今後の管理次第によっては錆が活動する可能性がある。したがって乾燥した環境で保存するように努める必要がある。製作したケース内にはシリカゲル、脱酸素剤と残留酸素のインディケーターが封入してある。シリカゲルは、ブルー色したシリカゲルがピンク色に変化する前に交換するか再生すること、また残留酸素のインディケーターがピンク色を呈した場合には直ちに新しい脱酸素剤と交換する必要がある。最後に劍に付着した繊維の調査については東京国立博物館沢田むつ代、井上洋一両氏に、また修復後の写真撮影は東京国立文化財研究所橋本弘次氏にお世話になった記して謝意を表したい。（青木繁夫、犬竹 和）

#### 参考文献

- 1) 青木繁夫「筑波山古墳出土鐵製品の錆の安定化処理に関する研究」  
保存科学26号（1987年）
- 2) 青木繁夫「夜須町峯遺跡出土金属遺物の保存修復研究」  
保存科学27号（1988年）
- 3) 「硝酸銀滴定法」JIS規格K0101
- 4) 青木繁夫・平尾良光「出土鐵製品の脱塩処理について」  
第10回古文化財科学研究会大会、講演要旨集（1988年）
- 5) 東京国立文化財研究所修復技術部編「保存修復材料」（1989年）
- 6) 青木繁夫「考古資料保存のガイドライン」ⅠおよびⅡ（1985年）
- 7) 青木繁夫「金属文化財の修復」「文化財の保存の修復」

東京国立文化財研究所——博物館・美術館等の保存担当学芸員研修会  
テキスト——（1987年）

## 第六章 総 括

公事塚古墳の調査概要及び出土品の解説等を発掘に参加した仲間達と報告しておいた。

この調査によって、この地方の古墳時代研究にいくつかの新しい問題等が提示された。

しかしそれが必ずしも解決したのではない。

これから私の責任において検討して行かねばならない問題である。そうした点を列記して報告書の結びとしたい。

### 1) 墳丘地山について

私がこの調査で最初に直面した問題は2号墳の墳丘が砂山であったために、これが盛土によったものであるか、それとも砂山を墳丘に利用したのかという点であった。

墳頂部を除いて墳丘は全て砂層であり、この地方の後期古墳としては全く例をみない墳丘の土砂に困惑した。それは第12図の断面図が良く示している。砂層のためにセクションをとることが出来なかったのである。しかも墳頂から50cm程のレベルに多量の鉄分を含む水平の層があり、人工的に入りえない自然現象であること。また墳丘の周囲に隙が認められないことから、この墳丘は墳頂部の一部を除いて自然地層の加工によるものと判断した。しかし5世紀後半の墳丘としてはあまり類例のないことであり半信半疑であったが、1号墳を発掘することによって解決した。

第6図に示す通り、1号墳では明らかに地山砂層が削り残され、その上面に1.5m程の盛土が確認されたのである。

### 2) 1号墳丘下の遺構について

本古墳群の調査において最も注目しなければならない点は、1号墳の墳丘下に発見された竪穴式住居状の遺構である。この詳細については紙幅の関係もあり別稿を用意しているのでそれを参照をいただきたいが、現時点での見通しを整理しておきたい。

この遺構は報告中にのべている様に私は単なる住居跡とは考えていない。何故ならばあまりにも整然として墳丘と一体化しているからである。しかも墳丘の築成時期を墳丘下のそれとが殆んど同一時期と考えられる点である。今になってみると墳丘を全て除去して、墳丘下の地山上面での観察をしなかったことがくやまれるが、おそらく地山を加工し、その北寄りに竪穴が掘られ、ここで何等かの儀礼が行われたことである。それが宿屋であったか喪屋であったかは証明することは出来ないが、精神的な儀礼が行われ、その後その建物が焼却され、そこに墳丘が築成されている。

しかもその堅穴状の遺構が短期間であったことが床面の状況で理解できるのである。

床面からは二次的な火を受けた朱彩の高坏片、坏片、小形坏片、及び甕片と共に同じく火をうけた滑石製品（劍形2、臼飞1、有孔円板5）が検出されている。そしてさらにその性格を知るであろう板葺かと見られる炭化材と自然木の発見である。

墳丘あるいは墳丘中の遺構として類例を求めるに、その性格は三種ある。

(A) 時代を異なる集落上に墳丘が築造される場合

これは最も一般的な例で、墳丘下より時代を異なる住居跡が発見されることである。最近の例では土浦市穴塚1号墳がある。ここでは墳丘下に弥生時代の住居跡が少なくとも10棟は確認されたという。(1)

「穴塚第1号墳周囲にはかなりの弥生時代堅穴住居址があったようである。今回墳丘調査中に10個の堅穴を発見した。…(略)…堅穴はいずれも隅丸方形の平面形と考えられ、戸を中央より北又は西に持つ。…調査上墳丘は保存されるので、時間的な制約からも弥生時代の集落を今回は追求することができなかった。」

とある。これらは示された土器からト野系の二軒屋式土器と思われ、前方後円墳とは時代的に全く異なり、集落が廃棄され、忘れられたところ墳丘が築造されるという関係である。

要するに古墳と墳丘下の住居は殆んど無関係である。

(B) 墳丘下に1棟ないし2棟の住居跡状遺構が検出される場合。

公事塚1号墳の墳丘下より墳丘築造とはほぼ同時期の住居跡状遺構が検出されることは、稀ではない。特に最近のように墳丘が調査後破壊される例が多くなると、発掘調査は従来と異なり、墳丘を取り除いてその下まで調査されることが多くなった。その結果時代を異なる住居とは異なる遺構が検出されている。

例えば、木更津市儀ヶ谷古墳群の4号墳について報告書は次のように記している。(2)

「当古墳の墳丘下からは、古墳築造前に宮まれた4軒の住居址が検出されている。……

B-3号住の東側上部に、境界の不明確な硬質面の広がりが認められ、その範囲内に炉址と考えられる焼土も存在したことから、一応住居址と判断し、B-0号住と仮称した。この硬質面は西側で直角的に切れている状況が捉えられたので、もともと方形プランの住居址であったとも考えられるが、柱穴や目立った遺物も検出されておらず、住居址でない可能性もある。……」

とあるが、データが不充分でこれ以上追究することは出来ない。しかし担当者は墳丘築造前に何等かの祭祀が行われ、その跡の可能性を示唆している。

市原市神門4号墳では次の様に報告している。

「主丘下の旧表土地山面は最大巾東西24m、南北16~17mが残存し、南半は大きく削られ

ている。この面は古墳築造に際して草木を焼き払っている。墳丘下には繩文時代、弥生時代、古墳時代の住居址が存在し、古墳時代の住居址六棟のなかには古墳築造を契機として移転したものも存在したようである。」と述べている。墳丘築造以前の形状を知る良好な報告例である。

特に注目されることは以下の記述である。

「主丘部中心よりやや東側の中軸線上に位置するA遺構は、炉は存在しないものの墳丘Dの通有の竪穴住居址と同じプランで、室内から全く遺物の出土ではなく、使用後清掃して一気に焼き払っている状況を示していた。」というものである。そして前方部寄りのB遺構から多数発見された土器群を「特定一度の祭式に使用された」と解釈し、「A、B両遺構・前方部との関連や鉢の数から新首長と神との神人共食儀礼用のセットと考えてもよい。」と結論づけている。そして「土器使用から盛上開始までの間に若干の空白期がある」とされる。田中氏はこれを特殊遺構とされているが、明らかに古墳築造以前の祭場であり、あるいは宿屋であった可能性も考えられる。

島根県宮山古墳群第Ⅲ号墳前方部西側の遺構。

「この住居跡は第Ⅲ号墳の築造以前に営まれており、西半部は前方部の盛り土の下に埋存していた。東西辺がわずかに長い隅丸方形プランを呈し、規模は南北径5.4m、東西径5.6mを測る。…（略）…床面の状態は全般的によく踏み固められ、ほぼ平坦になっていた。柱穴はそれぞれ対称的な位置に4個掘られている。これらはいずれも主柱穴と考えられるもので、内側に若干傾斜して掘り込まれている。」と記録したあとで、次の様に解釈されている。

「全面墳墓として利用されている丘陵上に竪穴住居跡1棟が営まれていたことも興味あることである。この住居跡は時期的に四隅突出型の第Ⅳ号墳といちらしく抵触し、かつ墳丘の南西突出部に接して建られている。……（略）…これは一般の生活跡というよりむしろ埋葬遺跡という特殊な場に伴う建物として第Ⅳ号墳との一体性において理解すべきものであろうか。」

具体的な性格については結論をさせておられるが、明らかに宿屋的な遺構を考えておられる。

福井県安保山古墳群4号墳と5号墳間の遺構<sup>(5)</sup>。

「規模は東西最大幅506cm、南北最大幅550cmで、平面積は約26.4m<sup>2</sup>（約16畳）である」とされさらに「炉跡は、住居跡内では検出されなかったが、住居跡北辺中央より150cm北で、長径95cm、短径66cm、深さ3～5cmの長円形の範囲内より木炭、灰が検出され、焼き火（3号炉）跡が認められた。また住居跡と4号墳との間西寄りからは、既に前節で述べた長方形

の炉（2号炉）跡が検出された。」と報告している。

最後に青木豊昭氏は考察編の中で次の様に整理されている。

遺構のあり方と竪穴内から検出された遺物から「モガリの儀式」を想定された。

兵庫県長尾・タイ山古墳群2～3号墳間の建築址<sup>⑥</sup>。

「タイ山頂上の古墳群のはば中央にあり、タイ山で検出された一例の竪穴式建築址である。……遺構の形状は地山の岩盤を掘った円形の竪穴式建築址である。」と報告している。詳細は紙面の都合上省略するが、考察編で多淵敏樹氏は「竪穴式建築の用途が祭祀又は殯の屋（宮）であることの可能性の検討」という項目を設けて次のように述べている。特に壁面のみられない建物構造と古墳群の中での建築物と古墳群の中での建築物の位置を重視して、「それを古墳群への祭祀か、あるいは殯のための意味に求めることは可能である。」としている。

#### (C) 墳丘内の埋葬施設面と同レベルで柱穴群が検出される。

この事例は発見が非常に困難な墳丘盛土のあるレベルで、何等かの建物遺構を確認する場合で兵庫県住吉東古墳の埋葬施設をとり囲む様に柱穴群が発見されるもので、現在では僅か1例にすぎないが、今後の調査の精密さによって発見されることも予想される。1例をあげておこう。兵庫県住吉東古墳がそれである<sup>⑦</sup>。正式な調査報告は刊行されていないので詳細を述べることは出来ないが、須藤広氏の教示によると「高さ50～70cmの盛土をし、平坦な場所を造ったあとに、死者の葬儀のための建物（喪屋）を造った」という。1988年9月26日に神戸市教育委員会が実施した現況資料によると次の様に述べてる。

この古墳は全長24mの帆立貝式古墳で（イ）「埋葬施設を取り囲む様検出された、13ヶ所の柱穴からは、南北3間（約5m）×東西4間（約6.5m）の掘立建物が復元できる。（ロ）また建物の北側で見つかった5本の柱穴は、目隠し櫛と考えられる。」とある。これらの情報は未だ正式なものではなく発掘調査途中のデータであるので今後変更されることもあるが、1日も早い報告書の刊行を願うのは私だけないだろう。

以上小生の管見する古墳墳丘下の遺構についてその類例を求めて整理したが、公事塚1号墳墳丘下の遺構については、ある程度その性格を理解し得たと思う。特に注目されることは祭祀遺物の検出である。今まで発見されたこの種の遺構から、祭祀を断定する決定的な遺物を検出することが出来ず、決め手に欠けていた。しかしこの種遺物が確実に竪穴状遺構の床面から検出され、しかも建物焼却のために滑石がもろくなっている点を考えると、確実に殯屋の一種と考えて誤りないだろう。

多淵敏樹氏も述べておられる様に<sup>⑧</sup>、今後は古墳及び古墳群の調査について、こうした遺構存否を確認する必要がある。

### 3) 埋葬施設北側出土の剣について

最後に埋葬施設北側から鉄鎌数本とともに1振剣が発見されたことは既に報告した通りである。この部分に埋葬施設（第二主体）が存在しなかったことは明らかで、墳丘内におさめられたものである。

この剣が所謂蛇行剣の可能性が強いことを、小沢氏は報文中で注意している。鈍化が強く不詳の部分が多いために、東京国立文化財研究所でレントゲン撮影をしていただいたところ、剣身が曲身であることが判明した（図版16）

しかし栃木県桑57号墳<sup>④</sup>の様な鋭い突起状の蛇行ではなく、通有の曲身である。楠元哲夫氏の集成<sup>⑤</sup>を利用させていただくと、大阪府大塚古墳第2主体部出土<sup>⑥</sup>の剣身に近く、長野県ネガ古墳出土<sup>⑦</sup>の例の様に大きく蛇行もしていない。しかし直身剣ではなく、この種の類例に加るべきであろう。

以上3点が特に今回の調査の中で注目される点であろう。最後にこの地方の古墳文化を追究する上で本墳の意義を何点が列記する必要があろう。

① 当然存在すべき埴輪が全く樹立されていなかったことは、この地方の埴輪のあり方について注意しなければならない。遺物等の組み合せから5世紀代の後半に比定されるものであり、円墳としては小規模に類するものではない。しかし墳丘の8割近くを削ったにもかかわらず、1片の埴輪片も採集することが出来なかった。このことは築造当初から円筒埴輪を樹立していないといえる。従来私達はこの時期には墳形の種類や大小にかかわらず埴輪が樹立されるものへと推考していたが、今後の資料の増加を待って検討する必要がある。

② 直径25mで墳頂平坦部を有する円墳の調査はあまり行われなかった。当然箱式石棺を埋葬施設とする考えが支配的であるにかかわらず、本棺直葬であった点は、この地方の古墳の調査に改めて精密な調査の必要性を訴えることになった。この地方にとって本墳の調査は重要な意味を持つであろう。

### 註

- 1) 梶山林継他『常陸穴塚発掘調査概要』国学院大学穴塚調査団 1971年3月
- 2) 小沢洋他『猿ヶ谷古墳群』財團法人君津郡市文化財センター 1988年3月
- 3) 田中新史『市原市神門四号墳の出現とその系譜』古代63 1977年
- 4) 前島巳基『宮山古墳群』島根県文化財愛護協会、昭和49年6月

- 5) 青木豊昭『安保山古墳群』福井県教育委員会, 昭和50年3月
- 6) 多淵敏樹他『長尾, タイ山古墳群』龍野市教育委員会, 1982年1月
- 7) 神戸市教育委員会須藤広氏より教示。現説資料。住吉宮町遺跡第9回発掘調査概要—住吉東古墳発見の堀立柱建物— 神戸市教育委員会, 昭和63年9月26日 『地下に眠る神戸の歴史展』神戸市教育委員会 1988
- 8) 大阿久震平『桑57号墳発掘調査報告書』小山市教育委員会 昭和47年11月
- 9) 楠元哲夫他『宇陀北原古墳』大宇陀町役場 昭和61年11月
- 10) 柳本照雄他『攝津豊中大塚古墳』豊中市教育委員会 1987年3月
- 11) 藤森栄一・宮坂光昭「激訪上社フネ古墳」考古学集刊第3巻第1号 昭和40年6月

# 図 版

図版 1



遺跡附近航空写真

図版 2



(1) 公事塚古墳群遠景（干拓堤防より）



(2) 公事塚古墳群の現況（88. 06. 23）

図版 3



(1) 一号墳全景（二号墳頂より）

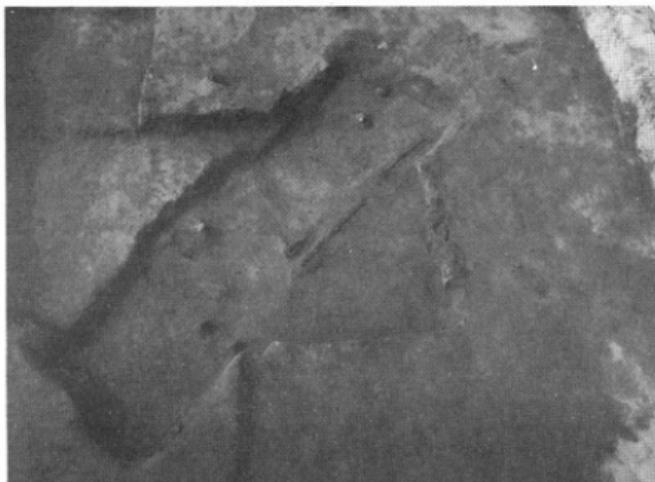


(2) 一号墳墳頂部調査区

図版 4

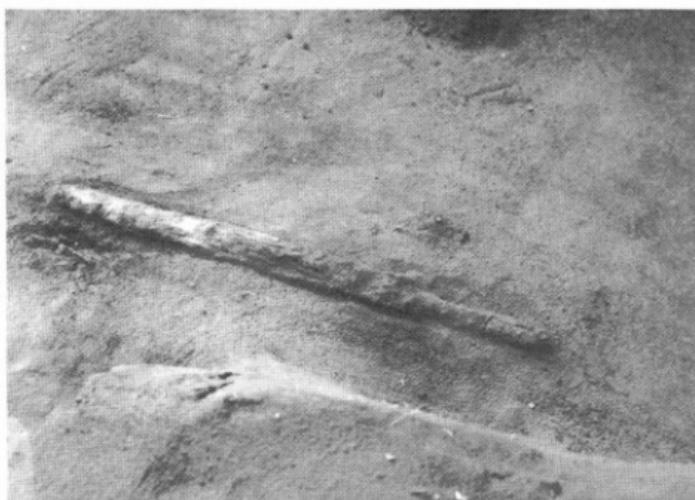


(1) 一号墳埋葬施設（タテ位置）

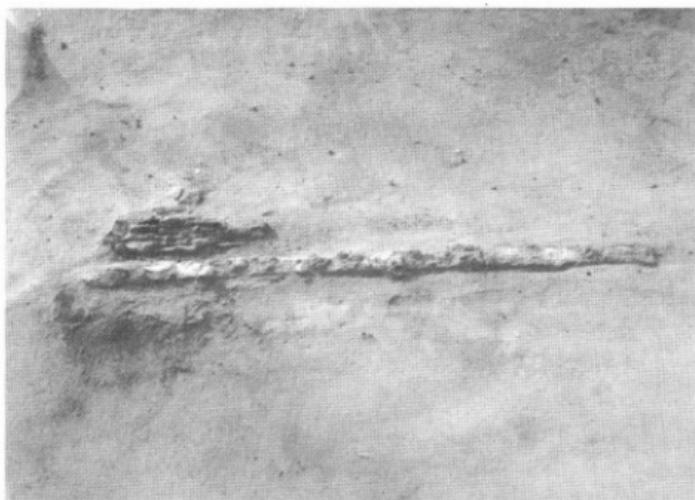


(2) 一号墳埋葬施設（ヨコ位置）

图版 5



(1) 一号墳埋葬施設鐵劍出土状況

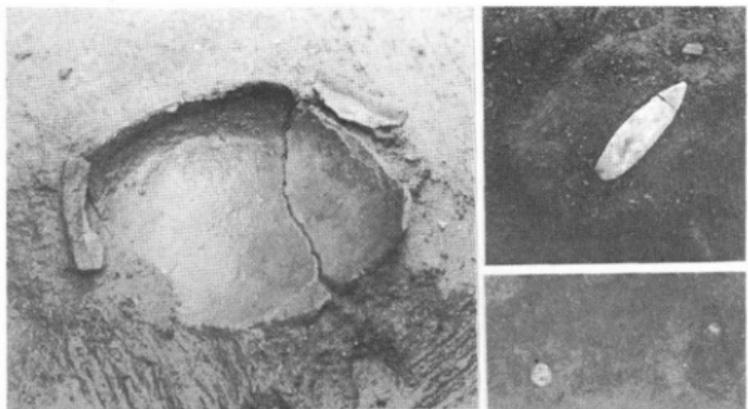


(2) 一号墳埋葬施設直刀、鐵劍出土状況

図版 6



(1) 一号墳埴丘下竪穴全景

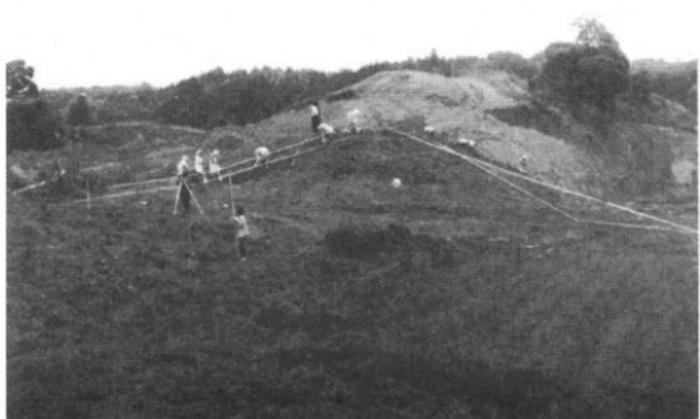


(2) 一号墳埴丘下竪穴床面遺物の出土状況

図版 7



(1) 二号墳全景（一号墳頂より）



(2) 二号墳調査区設定

図版 8



(1) 二号墳南北トレンチ北側調査風景



(2) 二号墳南西墳丘断面状況

図版 9



(1) 二号墳埴丘北側土師器群出土状況



(2) 二号墳埴丘北側土師器群出土状況

図版10



①



④



②



⑤



⑥



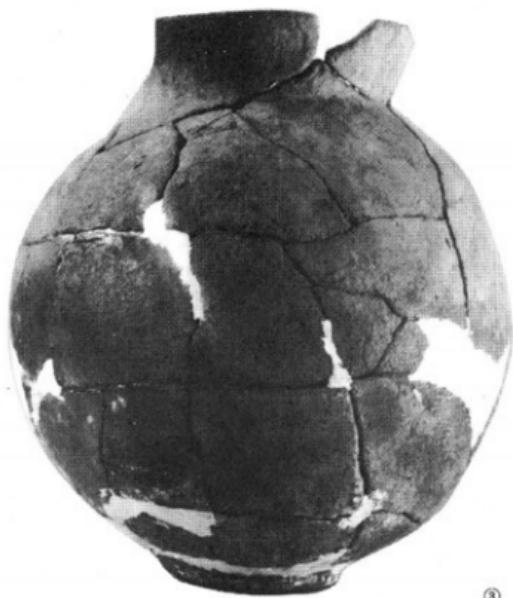
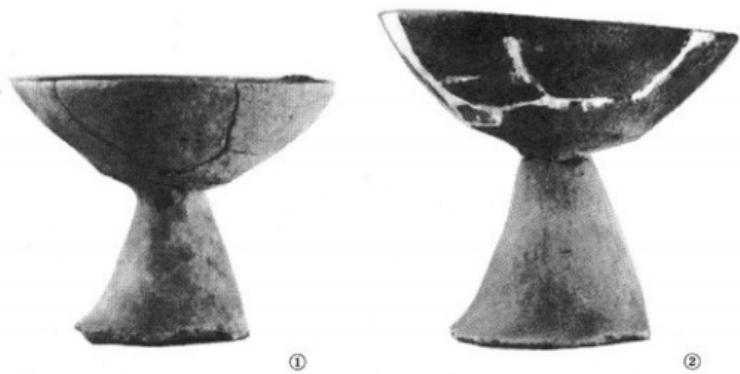
⑧



⑦

遺物（土師器）① 一号填出土 ②～⑦ 二号填出土

図版11

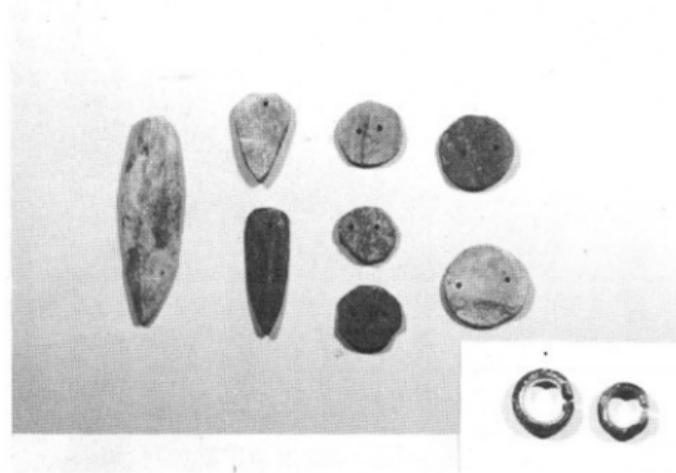


遺物（土師器）①～③ 二号墳出土

图版12



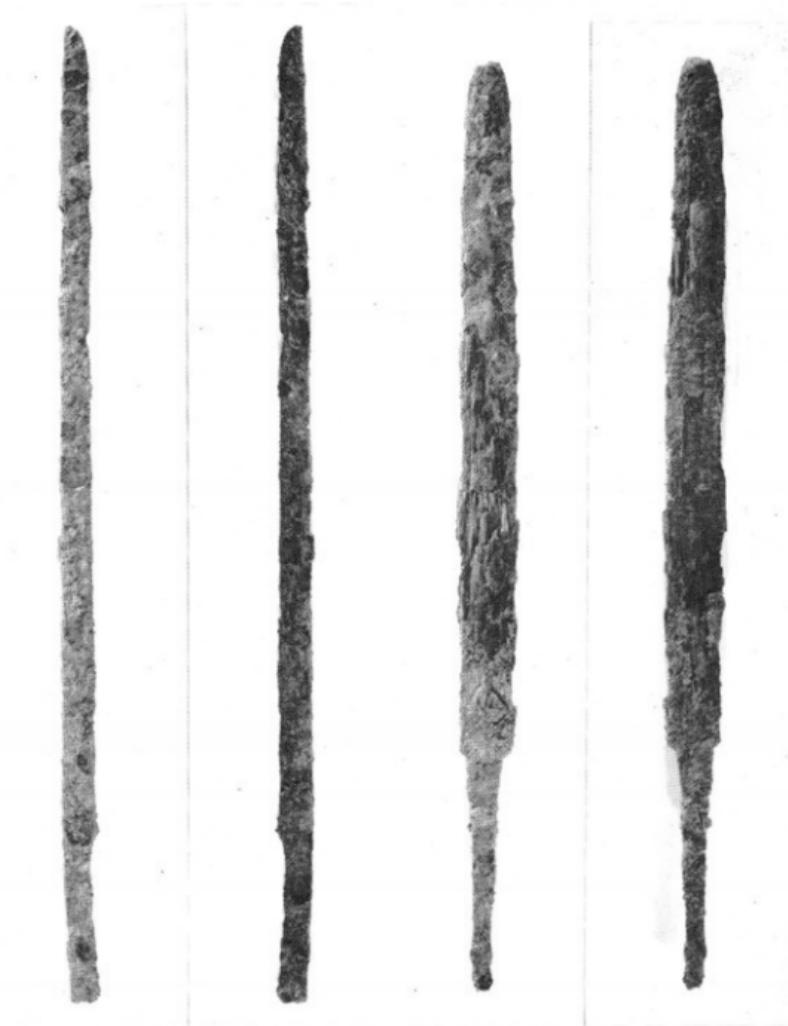
(1) 一号填出土玉類



(2) 一号填出土石製模造品

(3) 二号填出土金環

図版13



一号墳埋葬施設出土鉄器（①直刀 ②剣）（撮影＝青木・犬竹）

図版14



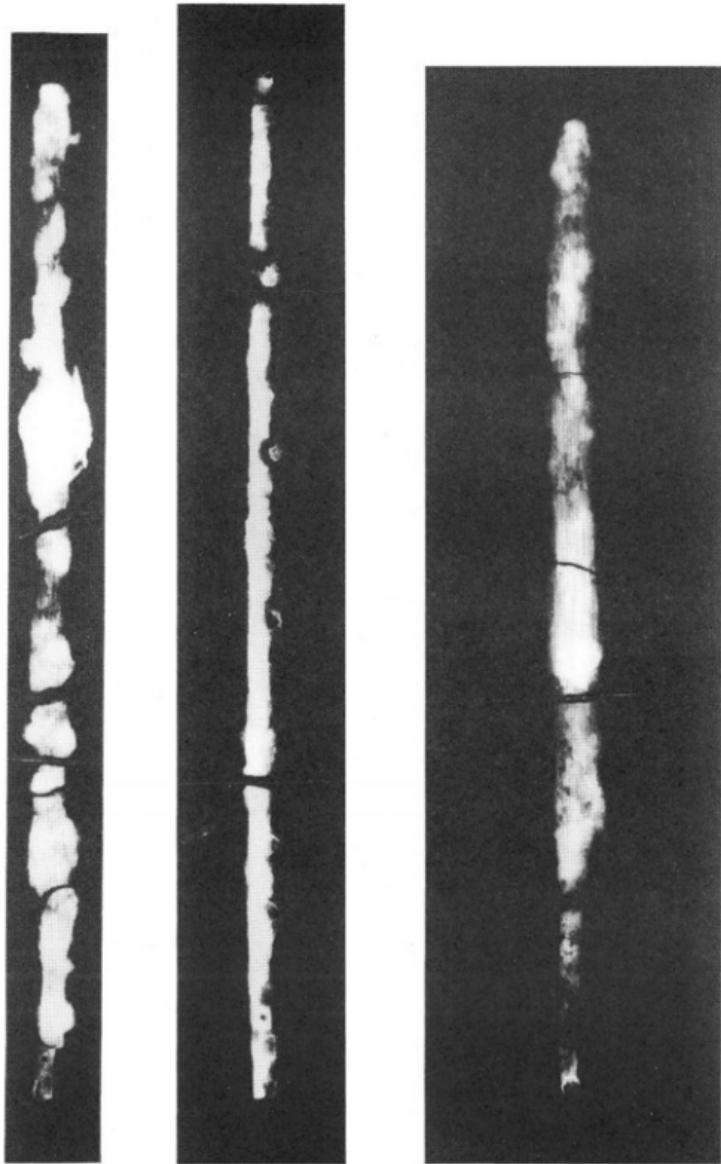
一号墳埋葬施設北下出土鉄剣

図版15



一号墳出土鉄鎌類（撮影=青木・犬竹）

図版16



一号墳出土鉄器X線写真（撮影＝石川陸郎氏）

常陸公事塚古墳群

1989年6月1日 発行

編集 茨城大学人文学部史学第六研究室

発行 麻生町教育委員会

〒311-38 茨城県行方郡麻生町麻生1561-9

印刷 麻生印刷